

〈講演会記録〉

京都産業大学世界問題研究所 国際シンポジウム
「企業の社会的責任とアジア思想：中国知識人との対話」

東 郷 和 彦

International symposium held by the Institute for World Affairs, Kyoto Sangyo University

“Corporate Social Responsibility and Asian Thoughts:
Dialogue with Chinese Intellectuals”

Kazuhiko TOGO

今回のシンポジウムの主要なテーマは、「企業の社会的責任」である。このテーマは、国内的にも国際的にも議論されてから久しく、本質的には、現在の資本主義社会を構成する各企業自身の問題である。同時に、この問題は、企業自身から少し距離をおいた大学・シンクタンク・非営利団体等において様々に議論されてきたものであるが、そのうちの一つとしてこの問題を考え続けてきた団体として「経済人コー円卓会議（CRT）」がある。

CRT は 1986 年、フレデリック・フィリップス（フィリップス元会長）、オリビエ・ジスカール・デスタン（欧州ビジネス研究所元副会長）によって創設され、日本と欧米の経済摩擦を緩和する方策を研究するために創設された。日本からは、賀来龍三郎（元キャノン社長）が参加、「共生」の理念を提起、1994 年これを織り込んだ CRT 経済人原則が採択された。

世界経済はそのころから、日本と欧米の経済摩擦が緩和される一方、中国を筆頭にアジア経済の台頭著しく、より幅広い経済主体の社会的責任の問題を包含して考える必要があるという問題意識が生まれるに至った。

そのような問題意識の反映として、2015 年 5 月、東京にてグローバル CRT と CRT 日本委員会との共催で『持続可能な開発目標（SDG）』に関する「日本からの提言」を検討するためのセミナーが開催され、ここでとりまとめられた「提言」は国連にも提出された。

今回の京都シンポジウムは、グローバル CRT 事務局長（米国）、CRT 日本委員会会長、その他さまざまな観点から日本の企業行動と日本思想を語る日本人パネリストが参加。中国からは中華炎黄文化研究会から中国の思想を語る研究者を招待し、基調講演・パネル討論・会場との応答等を組み合わ

せて、熱気ある議論が行われた。

なお、世界問題研究所としては、本シンポジウムで議論した問題は、『日本発の「世界」思想：哲学・公共・外交』（藤原書店、2017年）として上梓した共同研究において考究した諸問題と少なからず共通する部分があり、今後の研究所としての共同研究を考えるうえで裨益する点が多数あった旨を付言しておきたい。

シンポジウム・プログラム

2018 年 3 月 21 日（水・祝）

於 京都産業大学 むすびわざ館

開会の挨拶 大西 辰彦（京都産業大学副学長）

ビデオレター エズラ・ヴォーゲル（ハーバード大学名誉教授）

基調講演 1 スティーヴ・ヤング（グローバル CRT 事務局長）

基調講演 2 楊 恒達（中華炎黄文化研究会倫理専門委員会執行会長）

基調講演 3 川勝 平太（静岡県知事）

パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト スティーヴ・ヤング（グローバル CRT 事務局長）

楊 恒達（中華炎黄文化研究会倫理専門委員会執行会長）

川勝 平太（静岡県知事）

楊 煦生（北京大学高等研究院世界論理研究センター教授）

葦津 敬之（宗像大社宮司）

矢野 弘典（CRT 日本委員会会長）

中谷 真憲（京都産業大学世界問題研究所員 法学部教授）

総括 東郷 和彦（京都産業大学世界問題研究所長）

総合司会 東郷 和彦（京都産業大学世界問題研究所長）

【主催】 京都産業大学世界問題研究所

【共催】 中華炎黄文化研究会 経済人コー円卓会議（CRT）

京都産業大学世界問題研究所 国際シンポジウム

「企業の社会的責任とアジア思想：中国知識人との対話」

2018年3月21日（水・祝）

京都産業大学 むすびわざ館

東郷 和彦（京都産業大学世界問題研究所長）

定刻になりましたので、シンポジウムを始めさせていただきたいと思います。

きょうは「企業の社会的責任とアジア思想：中国知識人との対話」というシンポジウムを開催いたします。

私、京都産業大学世界問題研究所長の東郷和彦でございます。きょうの総合司会を務めさせていただきます。よろしくお願いします。（拍手）

きょうのシンポジウムは、私たち京都産業大学世界問題研究所主催、それから中華炎黄文化研究会、経済人コー円卓会議共催でございます。一緒に準備をしてくださいました中華炎黄文化研究会、それから経済人コー円卓会議の皆様、どうもありがとうございました。皆様お越しいただきまして、本当にありがとうございます。ちょっと雨が降っていて、なかなか人の集まりにくい中に皆さん来ていただきまして、心から感謝申し上げたいと思います。

それでは、早速きょうの会合を始めさせていただきたいと思います。

まず最初に、本学副学長、大西辰彦より皆様にご挨拶申し上げます。大西先生、ご登壇よろしくお願ひします。

開会の挨拶

京都産業大学副学長 大西 辰彦

ただいまご紹介をいただきました京都産業大学副学長の大西でございます。

本日は、お忙しい中、当シンポジウムにこのように多くの皆様にご出席を賜りまして、心からうれしく、そして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

また、本日ご登壇いただきます各講師の先生方、スティーヴ・ヤング先生、楊恒達先生、そして静岡県の川勝平太知事、大変お忙しい中、遠方からご参加いただきまして、心から御礼を申し上げます。また、スティーヴ・ヤング先生におかれましては、本学の東郷研究所長とそれぞれのお父様同士が国

をまたいだドラマチックなご縁があるというふうにお聞きもしております。本日、こうした再開の機会が持たれましたことを関係者として大変うれしく思うところでございます。

少しご紹介をさせていただきますけれども、本学、京都産業大学は、京都上賀茂の地に、文系・理系の9学部10大学院研究科を擁しております、ほぼ1万3,000人の学生がワンキャンパスに集まっております、各学部ごとの専門教育はもとよりでございますけれども、文理融合のカリキュラムの提供や、また、学生個々の人間力、人としての力強さ、こういったものを高めるためのキャリア教育などにも力を入れている大学でございます。またあわせて研究部門にも力を注いでおりまして、本日主催をしております世界問題研究所をはじめ、日本文化研究所やタンパク質動態研究所、こういった独創的あるいは先端的な研究所を6つ持っております。加えまして、本学の学祖でもあります荒木俊馬先生が宇宙物理学者であったということもございまして、神山天文台を開設しております。1.3メートルという私立大学では日本で一番大きな反射望遠鏡を擁している天文台でございますが、こうした研究所を中心に、世界トップレベルの研究を展開してきているところでございます。

そして、この地京都は、千年を超える歴史都市として、また大学の集積率という意味から言うと日本一を誇る学術都市として、そして、国際的な観光都市として、世界に向けその存在感を示しているところでございます。

本日のこのシンポジウムのテーマでもあります企業の社会的責任、CSRという観点からも、この京都はユニークな側面を持っている都市でもあります。皆さんご存じのように、京都にはいわゆる老舗企業が大変多く存在しております。100年を超える老舗企業がはっきりわかっているレベルでも2,000社を超えておりますし、3,000社、4,000社というようなことも言われております。そうした老舗企業では、会社の規模が大きくなるということよりも、社業が長く続くということのほうが価値があるというふうに考えているところもございます。

老舗には家訓として伝わる大変示唆に富んだ教えがたくさんございまして、その代表的なものが「先義後利」という考え方です。まずもって「義」、これは人あるいは社会というものを裏切らない正しき行い、これをまずもって求めていけば、必ず利益はついてくる、そういう教えでございます。この「先義後利」でございますが、その思想の源流は中国の孟子にあるということでございます。そういう思想は、「本業に徹する」、あるいは「無駄な投機はしない」、「つくるからにはホンマもん」、「人まねはしない」、といった京都企業の気風、つまりエートスと申しましょうか、こういったものを形づくっているわけでございます。

そして、そのエートスは、老舗企業だけではなく、戦後生まれの京都企業、とりわけハイテク分野の躍進企業に伝播しております。例えば京セラ、村田製作所、オムロン、日本電産、こういったハイテク企業はいずれも戦後生まれの成長・高収益企業でございますが、そういった企業にも脈々と受け継がれ、日本経済がバブル経済崩壊後、負の遺産、これに日本企業が苦しむ中で、株、不動産などの

無駄な投機をしなかった京都企業が、その後、急成長につながった、その一つの要因だというふうにも言われているところがございます。

現在の日本では、いわゆる名門大手企業と言われている企業が不正行為などで大きなつまずきを起こしたりしております。今、改めて企業の倫理的、あるいは社会的責任が問われているところがございます。また、国際的な視点から言いますと、公平・公正な競争市場を構築していくという上でも、例えば環境コストの問題などは避けて通れない課題でございまして、そういった課題がたくさん今あるところがございます。こういう時期に、米・中・日の思想のトップリーダーが一堂に集いましてこうして議論を交わすことは、大いに的を射た、そして大変意義深い取り組みであると考えております。改めてこの企画を実行されました東郷世界問題研究所長、そして本日ご登壇いただきます各先生方に敬意を表したいというふうに思っております。

最後になりましたけれども、本日ご出席の皆様への重ねての御礼と、そしてこの国際シンポジウムが実り多いものとなりまして、今後の研究所、そして各国のさらなる発展の一歩になりますことを心から祈念をいたしまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。

本日はご参加、まことにありがとうございます。(拍手)

東郷 大西先生、本当にありがとうございました。先義後利、京都の企業の中に長く伝わってまいりました企業の本質の点に触れられて、かつ現代の日本におけるさまざまな企業問題についても触れていただきまして、まさにきょうの「企業の社会的責任とアジア思想」ということを始めるに当たって、誠に勇気づけられるすばらしい挨拶をありがとうございました。皆さん、もう一度盛大な拍手をお願いします。(拍手)

ビデオレター

ハーバード大学名誉教授 エズラ・ヴォーゲル

東郷 それでは次の企画といたしまして、ハーバード大学名誉教授でおられるエズラ・ヴォーゲル先生のビデオメッセージをお送りしたいと思います。皆様ご記憶かと思いますが、エズラ・ヴォーゲル先生は、日本経済が右肩上がりですべて世界に向かってずっと伸びていたときに、1981年『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というその当時の大ベストセラーを書かれた方でありまして、日本経済がどうして強いのかについて世界に向かってメッセージを発してくださいました。その後、日本経済が右肩下がりになりまして、苦しい時代が続いている中で、エズラ・ヴォーゲル先生は中国語を勉強されまして、長い時間をかけまして鄧小平氏の伝記を書かれました。その両方の勉強をされて

いた結果として、私の理解するところ、エズラ・ヴォーゲル先生は人生の前半において最も勉強した日本と、後半において最も勉強した中国、この両方の国が仲よく世界を担っていくにはどうしたらいいかということについて、本当に心血を傾けて考えていらっしゃる方であります。今回も、ステイーヴ・ヤング先生のご紹介でこの計画をご説明したところ、ぜひ来たいんだけど、ちょっとボストンで仕事が多過ぎてどうしても来られない。しかし、自分の思いを何とかここで伝えたいというところで、きょうこのビデオメッセージになりましたので、私もこれを拝見するのは初めてでございます。どうぞ皆様、ヴォーゲル先生のメッセージをお聞きください。

（まず英語、次に日本語、最後に中国語で概ね同じ内容の発言を自ら行った。以下は英語発言の日本語訳である）

ヴォーゲル 道徳的資本主義について議論する会議を日本で開催し、日本及び中国の人たちがこの最も基本的な問題について議論するために集まったことを聞き、なによりもうれしく思います。

私が最初に日本に行ったのが1958年、中国に最初に行ったのが1973年でした。それから私は繰り返し両国を訪れました。そしてたくさんの仲の良い友達をつくることができました。私は、両国民がお互いに仲良くしてほしいと願っています。（以下中国語のみ：日本は唐時代以降、仏教そのほかたくさんの方の中国から学んできました。今あまり両国関係はよくないということですが）両国民ともに、たくさんの優れた人と非常にすぐれたアイデアを持っています。

私自身、日中関係に関する本を書きたいと考えるようになりました。そして歴史をひもとくことで、両国の関係性をよりよく理解し、両国がお互いにもっと仲良くなれるのではないかと思います。そして、日中ともに協力して発展して欲しいと思いました。

本日、道徳的資本主義についての議論をするための会合を開催され、若きビジネス・リーダーたちを一堂に集めようとしておられることは、日中が非常に近い協力関係をつくり、政治指導者たちにすべてを任せるわけにはいかないことを示していると思います。

ビジネス世界、それから知的世界にいる私たちもまた、両国関係を作るためのリーダーシップをとらなくてはならないと思います。両国の皆様に、心からの声援を送ります。

ありがとうございました。（拍手）

基調講演 1

グローバル CRT 事務局長 スティーヴ・ヤング

東郷 3つの言葉で同時に僕らに語りかけてくださって、本当に感動しました。

それでは、エズラ・ヴォーゲル先生の3カ国語による感動的なメッセージの後に、これからきょうのシンポジウムの本番でありますところの基調講演を始めたいと思います。基調講演の最初は、今、エズラ・ヴォーゲルさんのメッセージをアレンジしてくださったスティーヴ・ヤングさんであります。

スティーヴ・ヤングさんは、ハーバード大学で副学長を務められた後、彼の今の仕事は、グローバル・コー円卓会議の事務局長でおられます。ただ一言、それ以外にご紹介させていただきますと、スティーヴの両親と私の両親は長い間の友達でありまして、私が大学時代に初めてアメリカに行ったときに、アメリカというものを紹介してくれたのもスティーヴさんでした。スティーヴさんはそれから、国務省の最も優秀な役人として、陥落前のサイゴン、ベトナムに赴任されまして、ベトナムで非常な勉強をされまして、ベトナム人の奥さんを持たれました。ところが、その後、ご案内のアメリカの政策変更によってベトナムに大きな政策転換があつて、スティーヴさんは自分の家族と、それからアメリカの支持のもとにベトナムの中で長く国づくりをやっておられた南ベトナムの方たちがアメリカに引き上げた後、その方たちを大事にするという、極めて困難だけれども極めて大事な仕事を長くやってこられる中で、コー円卓会議の事務局長というお仕事を発見されました。

したがって、スティーヴ・ヤングの心の中には、世界の企業、資本主義がどうあるべきかということと同時に、スティーヴが長く親しんできたベトナム、日本、そして今、中国、こういうアジアの人たちとともに、企業のこれからのあり方というものを考えていきたいということが、彼のいわばライフワークなわけであります。今回のシンポジウムのアレンジもスティーヴがやろうよと言ってきたことが非常に大きな力になっております。そういう背景の下で、きょう最初の基調講演をスティーヴ・ヤングさんをお願いしたいと思います。

ヤング ご紹介をいただきまして、ありがとうございます。皆様、こんにち。まず最初に、お礼を申し上げたいと思います。そして個人的な背景を少しお話ししたいと思います。

本日のイベントは、非常に重要だと思っております。ヴォーゲル教授もおっしゃっておりました。世界では中国と日本の関係ほど重要なことはそうたくさんありません。そして、この二つの偉大な民族の深い文化的伝統の相互理解をもって、両国関係をさらに進展させていくことは、非常に重要だと思っております。

そういうことが実現したことについて、最初に東郷和彦教授と京都産業大学の教員の皆様にお礼を

申し上げたいと思います。また CRT ジャパンの皆様、現在会長をしておられる矢野弘典様、事務局長をしておられる石田寛様、当時キャノンの会長をしておられた賀来隆三郎様とともに「共生」という日本の概念を CRT の倫理的原則の一つとされた金子保久様、みな様に感謝の念を表明したいと思います。

また相馬雪香様、長い間日本の「道徳的再武装」運動をひきいておられた尾崎行雄様のお嬢様で、アメリカ人としての私を歓待してくださり、ご自身とお父様のビジョンを共有させていただいたことに対して、深く感謝申し上げます。そして尾崎行雄氏が東京都知事だったときに、1912 年にワシントン D.C. に桜の木を送ったということを相馬様からうかがい、私としては信じがたい驚きを感じた次第です。私の出身地であるワシントンで今非常に大きく育っている桜の木をお贈りになった方のお嬢様と話していることを知り、本当に驚きました。真に感動的でした。また、橋本徹 CRT ジャパン名誉会長のリーダーシップに対しまして御礼を申し上げたいと思います。また中国から来られた同僚の先生方、特に楊恒達教授、中国からの中華炎黄文化研究会の方々、企業の方々、知識人そのほか、暁瞬の聖賢の時代にさかのぼる中国国民の核となる文化と価値について深く考えておられる方々に感謝の念を表したいと思います。

皆様、本日私は、日本と中国の倫理と道徳的価値についてお話ししたいと思っていますので、私自身について少しだけお話しさせていただければと存じます。私はヴォーゲル先生のように、日本語と中国語を話すことができません。英語と若干の西洋の言葉以外には、私は、タイ語とベトナム語しか話せないのですが、なぜ中国の皆様、日本の皆様の伝統を評価するようになったかについて申し上げたいと思います。

率直に申し上げれば、それは父に関連しています。1937 年、父がハーバードの大学生だったとき、1 年間広州にある嶺南大学に留学し、北京にある燕南大学（今は北大といいます）にも留学しました。そして彼は私たち子どもたちに、日本や中国の文化に対する憧れについて熱く語ってくれました。東郷教授がおっしゃったように、私の父と東郷先生のお父様との間には、1940 年、41 年と東郷先生のお父様がケンブリッジ、マサチューセッツに留学し、ハーバードで私の父と一緒に勉強しておられた時から、家族間の長い関係がありました。

私は「仁義」と「怨」という中国儒教の倫理観の一つの例がそこにあるのではないかと考えたのです。それは 1941 年 12 月 7 日に日本が真珠湾を攻撃したときに、私の祖母が示した反応でした。真珠湾攻撃のニュースはケンブリッジに昼頃に入りました。祖母は直に東郷文彦氏（東郷先生のお父様、その時は本城文彦でした）のことを考え、「彼はどこにいるのか？彼はとても心配しているに違いない」と言いました。それを聞いた父は、直に文彦氏を探し出し、それからしばらくの間祖母は文彦氏を保護し、交換船で文彦氏がそのほかの大使館員と一緒に日本に帰るまで、その保護は続きました。私の祖母は若き文彦青年に対して、「今両国政府の間で戦争がはじまりました。しかし私たち人間同

士は、戦に入る必要はありません。私たち人間同士は関係を続けることはできるし、長期的に見ればそれが大事なことなのです」と話したそうです。私はこの点について、ずっと祖母を尊敬してきました。文彦氏は帰国後開戦の時の東条内閣と終戦の時の鈴木内閣の外相を務めた東郷茂徳の娘と結婚され、東郷姓を名乗るようになりました。

さて、中国の政治思想と思想家についてコメントしたいと思います。私は、この点については、なにがしかの自信をもって申し上げられると思います。私は数年間ハーバード・ロースクールで、ベトナム人の教授グエン・ノク・フィ氏と一緒に研究し、伝統的中国と伝統的ベトナムにおける人権について共著を著しました。私は中国の偉大な思想家の著作を英語で読み、フィ教授は中国語で読みました。フィ氏は例えば「韓非子」をベトナム語に訳し、私はそれを読むこともできました。私はアメリカ人で中国人ではありませんが、私の理解と思想というものが余りずれていないと私は望んでおります。

私たち世界のグローバルコミュニティは、持続可能な開発という議題に向かって進んでいます。国連の17の「持続可能な開発目標（SDG）」は、中国、日本、アメリカその他の多くの政府によって受け入れられ、推挙されています。そして2015年に東京及び北京で行われたCRT会議から、持続可能な開発目標というものは、日本と中国の伝統的倫理観に合致したものでなければならないということを知っています。しかしながら、19世紀から始まった近代化というものは、二重の理想というものを残しています。一方において、合理的・物質的な理想主義が求められています。他方において、精神的・倫理的な理想主義が求められています。この後者は、現代のアメリカの研究家が言うところの感情的、あるいは社会的な知見である、それに近いというふうに言いたいと思います。

現代のアメリカの研究者は、感情的あるいは社会的な知見とIQとを比較しています。特に西側では、IQを合理的・物質的な知見と考えがちですが、それとは別の種類の知見がある、このことを私は非常に重要なものと考えています。この精神的・倫理的知見というのは、個人的な倫理又はエトスをもち、合理主義と物質主義を越えて進んでいくものであります。そして私たち人生の精神的・倫理的側面は包括的または全体的な考え方につながっていきます。一見無神経で、絶望的で、孤立して、混乱したものでも、そこに首尾一貫したものを見つける。エトス又は道徳性は、1人を多数者と、自己を他者と結びつけるものです。理性自体は、絶対的な極端に至るまで、言葉による論理や概念化を好みます。対立する者の間の敵意、一つの知見の他の知見への従属、重要でも本質的でも真実でもない理想への従属、そういうことを明確化します。

他方において、精神的な洞察は、相互補完性に到達します。ダイナミックなプロセスを通じて、力と実質の協調的な相互作用が働きます。極端ということは存在しません。相互作用のみが存在します。私たちは、皮相的に、精神的・倫理的な知見は、ウィン・ウィン、あるいはポジティブ・サムにもっと容易につながるけれども、合理的・物質的なパラダイムは、ゼロサムの競争、または勝ち負け関

係、または生き残りをかけた戦いを助成すると言っています。

中国も日本も、調和を重んじそれを醸成する堅固な知的遺産をうけついでいます。この点についてエズラは私にメールを送り、私がこの点を強調してほしいと伝えてきました。中国と日本の類似性は、調和を重んじ、人生を考えるにあたって包括的なアプローチをとることにあります。中国と日本の共通性は、このように調和に基づいて人生を見るということです。このアプローチは、合理的・物質的知見よりも、精神的・倫理的な知見によるウィン・ウィンの包摂的共同作用を受け止めるものであります。

しかしながら、近代化の創始者で実施者は大部分は西洋人ですが、かれらは、合理的・物質的な理念に最も熱心でした。19世紀の経済発展の成功によって合理的・物質的な考え方がまさに人類の幸せを拡大化するという考えに根拠が与えられたのです。そして第二次世界大戦後のグローバルな経済協力は、グローバルな生活水準の劇的な成長を実現させたのです。合理的・物質的な考え方の選好を好む実務的で効率的な知恵を確認することとなりました。合理的・物質的思考の核心はサイエンス（科学）であり、このような考えは、プロテスタント改革の後に西洋で発展し、それ以降、すべての文化を通じて世界中に広まっていきました。

この合理的・物質的思考の創始者であり主張者となったのは、『社会契約論』と『不平等の源』を記したジョン・ジャック・ルソー、脱存在論と規範設定にあたっての理性の占有的な利用を述べたエマニエル・カント、痛みと快楽を人間の動機ととらえたジェレミー・ベンサム、物質主義を主唱し道德の活用を拒否したハーバート・スペンサー、弁証法的物質論を唱えたカール・マルクス、通常の道德性を否定し「力への意思」を主張したフリードリヒ・ニーチェ、そして、奇妙なとりあわせですが、人間の物質的・心理的な態応が恐怖と性的な人生経験から引き起こされることを主唱したジグモント・フロイド等がいます。更に西洋知識人の合理的・物質的思考は、19世紀後半の社会学と経済学の論理によって強化されえることとなりました。社会学でデュルクハイムとマックス・ウェーバーは、近代性を検証するためのテストとして理性を活用し、物質的世界を近代化されるべき対象としてとらえていました。

経済学ではアルフレッド・マーシャル、ピジュー、そしてケインズが、生産性と富の創出を世界的な成功の指標としました。他方ウェーバーは、合理的・物質的な進歩のパラダイムに、人類の福祉を図る基準を過度に依存することの危険性を見抜いていました。彼は文化や政治で精神的な考え方がないがしろにされていると、近代化は一層の失望に追いやられるのではないかと危惧していました。

しかしながら東洋においては、近代化は19世紀後半にこの明治期の日本で西洋から紹介され、中国でも康有為その他の人たちによって近代化と西洋化が進められました。精神的及び文化的努力が精神的・道德的知見の実際的な利用を維持するために、費やされました。今日でも、持続可能な発展を可能にするために、精神的・道德的知見が必要とされています。合理的・物質的な考え方を抑制と均

衡といった形で抑えるためには、やはり精神的・道徳的な考え方が必要であると思います。これこそフランス法皇が、最近の「回勅 Encyclical」で「Laudato si」と述べられたことです。したがって今日、中国と日本はともに手を携え、さらに重要な貢献をなしていかなければならないと思っています。世界の持続可能な開発とともに貢献をしていくことが可能だと思っています。

中国に関してはまず、「儒教」及び私が言うところの「偽の儒教」との区別をしておきたいと思います。この提言は、私がハーバード・ロースクールにいたときにファイ先生と一緒に発展させた、通常とは少しだけ異なった考えであります。私は「オリジナルな儒教」というものは、今日の考え方にとってとても重要だという考え方に強く同意しています。しかし中国ではこれに対抗する思想として、墨子から端を発し、秦と漢王朝において皇帝の社会的政治的制度を形作っていった法律尊重主義の「陰陽思想」という考え方がありました。これがまた中国で重要視されることになっていったのです。

純粹で単純な儒教としては、私は、『論語』、『中庸』、そして『孟子』をあげたいと思います。同じく、孔子と孟子が生き、人間性について彼らの提言を行った時代の文化をよりよく理解するために必要なものとして、『五経』をあげたいと思います。しかしながら私は『大学』は儒教の核心的な考え方からはずれていったものと考えます。また宋時代に発展したいわゆる「新儒教主義」と呼ばれる程頤、その兄弟の程頤、朱熹、王陽明などは皇帝制度の思想の一部ではないかと考えております。

他方において、孔子及び孟子のもつ道徳的な敏感さを直接的に受け継いでいる人たちもいます。現在における検討のために、孔子と孟子の核心的な道徳的な価値を考えてみましょう。孔子は「恕(shu)」または「相互性」であり、孟子は「仁義(Ren-Yi)」または「人間性」または「社会的、文化的な正当性」であったと考えることができます。「仁」と「義」は、孟子によって『孟子』の最初の節に、「利」、利潤、物質主義、自己利益に対する優先的な反対意見として述べられたのです。「恕」と「仁義」は、私たちの生物的存在において前頭葉にある道徳的感觉によって活性化されました。孔子と孟子はどちらも道徳的感觉を発揮するための内面的な能力を活性化する方法を教えようとししました。「恕」と「仁義」は、個人が自分の個人的な幸福を最適化するために、ほかの人と関与しなければならないような社会環境を想定します。「恕」と「仁義」に内在する道徳的感觉は、私たち人間の経験において、精神的・道徳的領域に生きるように誘発してくれます。道徳的感觉は、物質主義を超越する方向に向かって動かしてくれます。

中国の古い思想家たちは、中国史の「周」と「戦国時代」から生じた2つの伝統について書いてきました。一方において「王道(Wangdao)」すなわち王者の道、他方において「霸道(Badao)」すなわち将軍又は覇者の道です。しかしベトナムのファイ教授の中国の人権についての研究では、3つ目の選択肢を提案しております。これを「皇帝道(Wangdidao)」と呼び、これは「皇帝(Wangdi)」のための道です。

ここで私たちが区別した墨子を起源とする「皇帝道」は、権威主義的なルールを通じて人々に秩序

を課す儒教的観念ではありません。この枠組みは、「天 (Tian)」があり、これが「天子 (Tianzi)」すなわち「天の子」に指示を与え、天子から「天下 (Tianxia)」すなわち「天の下」にあるすべてに指示を与えるという観念的な枠組みです。この制度のもとにある人すべては、自分の自我と道徳を一人の天子を通じて天の意思と一致させるのです。この墨子のビジョンは、商鞅、申不害、韓非子のような法律尊重主義者に伝えられます。管仲や孫子のような政治顧問にも伝えられます。管仲は経済問題にこれを活用し、孫子はいかに戦争に勝つかに使います。そしてこれらすべてのアイデアは中国の初代の皇帝、秦の始皇帝によって適用されました。そこで私の論理は、皇帝道は王道及び覇道の両方を置き換え、合わせ実施したのではないかということです。置きかえている。これは歴代の中国の王朝によって、何度も何度も繰り返し実施されました。秦から 20 世紀初頭の清にいたるまでです。

この帝国の制度について語った論考の最初の編集は、すでに申し上げたように孔子本人から来たものではありません。これは呂不韋 (Lu Buwei) によって編集された『春秋』から来ております。中国の歴史について勉強されたかたは、呂不韋は中国の最初の皇帝になった秦の始皇帝を養育した人であり、孫子の意見や、孔子の意見の一部を集めて「皇帝の道」を示すためにこの『春秋』のテキストが書かれたことを知っていらっしゃると思いますね。私にとってこの「皇帝道」は、時代遅れで、鉄の規律による無政府主義であり、現代には適合しません。必要なのは、孔子自身による理念である「恕」と「仁義」なのです。

後半部について大至急お話しします。精神的・道徳的知性という同じような活動力が中国と日本にあることを活用することです。日本について「共生」のアイデアについて考えてみたいと思います。この共生のアイデアは、私はコー円卓会議に参加された賀来様から教えていただきました。彼は、ハーバード・ビジネス・レビューでこの「共生」の概念すなわち「ともに生きる (symbiosis)」について書かれました。そしてそこに五つのレベルがあると申されました。企業内協力という単純なレベル 1 から、政府と市民社会とのグローバルな協力活動にいたるレベル 5 まで取り込まれています。賀来様はこれを 1994 年から 95 年に書かれたと思うんですけども、これはまさに国連が 2015 年に「持続可能な開発目標」として採用したことと全く一致しています。一緒に生きる、一緒に仕事をするという日本人の鍵となるアイデアが、国連の非日本人によって活性化されたのです。なぜなら、社会の異なった部分の間において共生の必要があるという現実があるからです。

私はこのスピーチの結論として、日本の共生の概念がどのように人々を相一緒の場所にもたらすか、相互関係と相互信頼の環境にもたらすかに注目します。中国の思想において。「恕」と「仁義」がもたらそうとしたことと、非常によく似ています。「共生」と「恕」と「仁義」は、中国の文化と日本の文化が世界に対して一緒に貢献しうる旨提案するものであります。

本日はご清聴ありがとうございました。(拍手)

東郷 さかのぼられて儒教というものに戻られ、儒教が始まったときの、私たちが学校で勉強したときのいわゆる孔・孟の時代、そのころにあった本源的な儒教と、それからその後の歴史の中で大きく変わってきた、皇帝的な儒教との間に大きな差があり、その本源的な儒教の中に私たちがこれから学び取る大きな種があるのではないか。それが賀来先生が始められた「共生」との中に共通点があるんじゃないか。非常に示唆に富むお話を伺いまして、ありがとうございました。もう一度スティーヴ先生に拍手をお願いします。(拍手)

基調講演 2

中華炎黄文化研究会倫理専門委員会執行会長 楊 恒達

東郷 それでは次に、2 番目の基調講演者をお願いしたいと思います。2 番目の基調講演者は、楊恒達先生、ご登壇をお願いしたいと思います。

楊先生は、中国人民大学で教鞭をとられるとともに、中国炎黄文化研究会の倫理専門委員会で執行会長を務められております。哲学を専門にされ、中でもニーチェに焦点を当てた研究をされておられます。

それでは、楊先生よろしくお願いします。

楊恒達 尊敬する東郷先生、そして京都産業大学の皆様方、こんにちは。まずは東郷先生、今回はお招きをいただきまして、ありがとうございました。また京都大産業大学の皆様方、今回の開催のためにさまざまなご尽力をされました。ありがとうございました。そして皆様、お越しくださしましてありがとうございました。友人であるヤング先生には、東郷先生との間で架け橋になっていただいたこと、そして今回の会議の開催を進めて下さったこと、感謝しております。また、今回の会議のために具体的な作業を担当し、苦勞を厭わず会議の開催に貢献されました岑智偉先生、感謝申し上げます。

本日お話ししたいのは、儒家の君子の理想と、現代の経済社会におけるその試みです。今回、私、日本に参りましたが、日本は儒学思想の現代的意義を考えるのにとても適した場所です。なぜなら、東アジアの儒学の体系において、日本の儒学文化はとてもユニークな位置を占めるからです。日本は伝統をよく守りつつ、伝統を現代的ニーズや民族的ニーズに適応させています。しかし我々中国では二千年にも及ぶ儒学をいとも簡単に捨て去ってしまいました。周知のように、20 世紀には儒学文化は中国で非常に大きなダメージを受けました。そのため、今になって中国人の心の中に儒学思想の地位を確立しようとしても、とても難しいのです。この難しさは皆さんには想像しがたいものでしょう。

例えば2010年頃、天安門に孔子像が建てられました。しかし100日も経たないうちに移転させられました。中国歴史博物館に移転したのですが、ことほどさように、儒家思想の問題については、中国国内に様々な意見があるのです。

現在影響力があるのは二つの考え方です。一つは復古的なもので、形式主義的側面を重視します。例えば、若い人に弟子規を暗誦させたり、むかしの服である長袍を着るように求めたり、毎日孔子を拝めと言ったりという具合です。今の時代が儒家文化の精髓に何を求めているかを考えないのが、この考え方です。もう一つは、儒家思想はすでに時代によって捨て去られたと考えるものです。中国では五四運動の時から孔子を打倒せよと言われ、そのまま1966年には孔子の墓をあばくところまで行きました。こうなった以上はもう一度拾い上げる必要はない、それは無駄なことだ、というのです。

しかし、私の考えは違います。儒家思想が中国の二千年の文化的発展の中で果たしてきた、社会を安定させ、知識人の精神的素養を向上させ、知識人の道徳や行動を規範づける役割を過小評価してはならない。二千年にわたる精神的な力は役に立てることができるし、それは中国文化の奥深くに根付いているのだから、非常に価値があるのは当然である。重要なのは、いかにしてその価値を発掘し、現代のニーズや現代という時代に適応させるかだ、と考えるのです。ただし、儒家の「法先王」（古代の王にしたがう）の伝統には現代社会の合理的な批判精神と法治精神が欠けており、これは明らかに現代社会における儒家思想の価値ではありません。法治がなければ、孔子の言う「父は息子のために罪を隠してかばい、息子は父のために罪を隠してかばう。本当の正直さはその中にある」になってしまいます。これは法治を軽んじる考え方です。したがって、現代社会における儒家思想の価値を語るにあたっては、まずその前提に法治を置かなくてはなりません。

しかる後に、すでに大きく変化した時代や社会、および現代の人間観に立脚して、儒家思想の価値について改めて検討し、新たな結論を導かなくてはなりません。例えば、儒家と墨家の論争の中心課題である仁愛と兼愛の論争があります。孟子は「墨氏は無差別に他人を愛するが（兼愛）、これは父を無視することである」と述べ、これを「禽獣」と呼びました。孟子のロジックは、仁愛は必ず家庭から始まり、そこから家庭の外へ広がっていくというものです。まず家庭があって、愛も家庭の中に集散的に体现される。父を一家の長とし、子供は孝を尽くし、最も多くの愛が父親に与えられるべきである。ここから類推していけば、愛についての等差的観念が成立します。儒家はこれを人間本来のあり方だと考えます。孟子の考えでは、墨子が兼愛を提唱するのは、愛の等差的観念を放棄するものです。父親は本来受けるべき子供からの愛を受けられなくなり、「無父」となります。ただし、この問題に関する儒家思想の定義は必ずしも明確ではありません。というのも、私が先ほど申し上げたように、古代中国には理性的な批判精神がなかったのも、人について、人はどう定義されるのかという問題については、論理的で理性的な定義が存在せず、そのため様々な解釈が出てきたからです。しかし、我々は儒家思想が人の本質をどのように認識していたかを見る必要があります。例えば『論語』

において、儒家思想の核心は「仁」です。『論語』の中で、樊遲が仁について問うと、孔子は「人を愛することだ」と答えました。孟子も「仁ある人は人を愛する」と述べています。孔・孟の言う「人を愛する」の「人」の解釈は二通りしか考えられません。一つは語りの主体を含むすべての人であり、もう一つは語りの主体を含まないすべての人、言い換えれば他人のことです。古文における語り方の習慣からすると、ここでは「他人」を指しているに違いありません。しかし、孔・孟が相互性を強調していることから、ここで言われているのは一種の相互主体性のようなものです。「人を愛する」とはすべての人を愛するという意味であり、「人」の社会的属性や身分は考慮していません。孔・孟の古典の中にはこのような「人」が何度も出てきますが、そこでは社会的属性や身分は考慮されていません。例えば、孔子は「そもそも仁者は自分が樹立したいと思えば、まず人に樹立させる。自分が達成したいと思えば、まず人に達成させる」と述べました。また孟子は「わが家の老人をいたわる心持を拡張して、人の老人に及ぼし、わが家の幼児をかわいがる気持ちを拡張して、人の幼児に及ぼす」と述べました。ここで言う「人」とは、すべての人のことです。人道主義の「人」という字も同じ意味であり、すべての人に適用されます。

ただし、人が社会で生きる限り、人は社会的属性を持ちます。「人を愛する」という命題もこの問題を避けられません。あるいは、孔・孟が提唱する「人を愛する」が人の社会的属性や身分に基づく愛だとは言えませんが、それでも人の社会的属性や身分の違いは大きく、それを見て見ぬ振りすることはできないのです。「人を愛する」とは一つの基本原則であり、人に自然に備わる属性によって規定される範囲に依拠していますが、これは人に自然に備わる権利を尊重する人道主義と同じです。古代の中国に人道主義という言葉はありませんでしたが、「人道主義」という言葉で孔・孟の「人を愛する」を表現することは可能です。もちろん、社会の中には千差万別な人がいますが、自然に備わる属性が社会の中で変化したわけではなく、人が社会の中で異なる役割を担っているということなのです。一人の人は数多くの役割を担っています。役割が異なれば、愛し方も異なります。例えば、孔・孟は「家の中では父母に孝行を尽くし（孝）、家の外では年長者にしたがう（悌）」と述べていますが、そこで提唱されている「孝」と「悌」は異なる役割がそれぞれに持つ愛し方であり、愛される者も異なる役割を持つのです。したがって、儒家思想の中に「愛の等差」思想があるといっても、それは異なる役割に対応したものに過ぎません。このように、儒家思想における「人」と役割の違いを明確にしてこそ、儒家の仁愛思想の本当の意味を的確に理解できるのです。

孔子の倫理思想においては、君子が仁愛の模範であり、人としての道德の模範です。しかし、君子は世の中を超越した神や仙人ではありません。君子は人です。そのため、君子にもすべての人と同じく欲望があります。孔子は「富むことと身分が高いことは、人がほしがるものだ。道によらなければ、これを手に入れても、そこに居座るべきではない」と述べました。君子と常人の違いは、君子が「道」に立脚していることです。もちろん、孔子は常人が道を得られないとは考えていません。しか

し道を得るには修練が必要であり、修練が足りないと君子にはなれないのです。したがって、修練を怠れば、君子であっても小人に落ちてしまいます。だから修練はとても重要なのです。これを孔子は「修身」と呼びます。孔子の理想は「修斉治平（修身・齐家・治国・平天下）」ですが、その最初に来るのが「修身」なのです。「修斉治平」の理想を抱く人は君子の条件を備えています。そして現実の実践の中で「修斉治平」の理想を貫徹できる人こそが君子の道徳的リーダーシップを備えた人なのです。

企業について言うと、お金儲けをしないと企業とは言えません。したがって多くの人は「商売には狡さも必要」という言葉で商業的利己主義をとらえ、とくに倫理的利己主義には道理があり、それだけで終わってもよいとすら考えています。倫理的利己主義においては、すべての人は常に自分のために最善を尽くします。人はみな自己利益を重視しており、まさに自己利益のためにこそ、人は他人の利益を尊重しなければならないのです。なぜなら、そうしてこそ長期的な自己利益を促進できるからです。心理学における利己主義と比べると、倫理的利己主義は人々に自己利益を長期的に考えることを求め、それと同時に人々の利他主義的行為の動機は自己利益のためだと考えます。しかし、このように考えてしまうと、社会にとって貴重なものである自己犠牲の精神や利他主義を提唱・尊重・普及していくことはできなくなるでしょうし、それだけでなく、長期的利益を計算できずに他人の利益に損害を与える不道徳な行為を許したり、目の前の短期的利益の最大化を正当化したりしてしまうでしょう。長期的利益というものは、現時点ではっきり見通せるとは限りません。そのため、現実的な人は現実主義を追い求めると考えられています。これはつまり、現実の中で利己主義的に様々な利益を追い求めることです。これが人の追い求めるものだということになれば、人は倫理を度外視してしまいます。そのため、その人は目の前の短期的利益の最大化を正当化することになります。

この理論に基づいてさらに推論を広げてみましょう。人を騙して奪い取るような不道徳な行為こそが長期的利益の基礎であり、そのようなことをしても長期的利益は損なわれず、むしろおおいに増進するなどと考える人がいたとします。その人は、利益最大化を口実としてどんなことでもしてしまうでしょう。例えば、ある工場が手抜きや材料のごまかしで取引先を騙したら、取引先はその後注文してこなくなるかもしれません。しかし、その工場が新しい取引先を見つけさえすれば、売上に影響はなく、同じ手口で引き続き儲けることができます。もちろん、競争システムが健全な先進工業国では、このように信頼を軽視しているとだんだん苦しくなることでしょう。しかしある特定の期間（これは比較的長い期間かもしれませんが）、ある特定の地域に限って言えば、このようなやり方をしても利益が損なわれないケースがあるかもしれません。さらに、企業を管理しているのは人です。一度でも不道徳なやり方で暴利を貪ったら、たとえ企業は倒産しても、企業のリーダーがこの暴利を貪って得たお金で他の商売をすれば、彼の長期的利益は損なわれないかもしれません。したがって、もしも道徳の出発点を完全に個人の利益に置くならば、たとえ長期的にものを考えるように説いても、人の行

為に対する本当の道徳的制約にはならないでしょう。経営者の考える長期的利益と倫理学者が考える長期的利益は同じではありません。利益のことしか考えない経営者に対しては、人の理性、感情、信仰、自己犠牲精神など様々な要素を説くことによって、その人の利己主義的な行為は小人の行為なのだと気づかせなければなりません。そうしないと、社会の長期的利益が損なわれてしまいます。その時になって道徳的制約を意識しても、もう手遅れでしょう。

したがって、人であっても企業であっても、利益の最大化を追求する際に、自分が果たすべき社会的責任を忘れてはなりません。ではどうすれば社会的責任を忘れずに済むのでしょうか？これこそが君子と小人の違いです。小人の最大の特徴は恥を知らないことです。小人は自分の利己主義の追求が社会や他人にもたらす損害について、理解していないか考えないようにしています。君子はその正反対で、礼を重んじ恥を知ること（礼儀廉恥）を行動規範としています。君子も利益の最大化を追求しますが、そこには度の問題があります。度とは、すべての人の利益を最大化させる社会的なバランス・メカニズムの上に打ち立てられるものであり、またこのようなメカニズムが壊れないようにすることです。したがって、君子は社会的弱者をいかに助けるかを考えます。教育、職業訓練、慈善活動、公益活動、労働者保護、法律コンサルタントなど様々な分野からこの問題に取り組み、社会的弱者を助けて彼らが社会の中で公平に競争できるようにしようとしします。つまりゼロサムゲームの競争をウィンウィンの競争に変えるのです。

企業について申し上げますと、儒家における君子の道徳的リーダーシップの理想は、企業の社会的責任と密接に関わっています。君子も人であり、お金を稼いで家族を養わねばならないし、自分の地位に見合った生活水準を維持しなければなりません。しかし企業のリーダーが君子であるなら、自分や自分の企業のためにお金を稼ぐだけでなく、企業の社会的責任を引き受けなくてはなりません。ドイツの哲学者 Gerhold Becker は道徳的リーダーシップを定義して、「自己利益の超越」をその特徴と考えました。儒家の君子は「大同世界」の理想を抱き、「天下を以て公と為す」の原則を守る高尚な精神の持ち主でなくてはなりません。言い換えますと、天下は一人の天下ではなく、あらゆる人の天下なのです。そうすると君子は、義と利の間で選択を迫られれば、カントの言う「定言命法」にしたがうことになります。たとえそのせいで「弁当箱に一杯のご飯、ひさごのお椀に一杯の飲み物だけで、狭い路地裏に住んでいる。普通の人間ならうざりして耐えられない」という暮らしを強いられても、君子はその暮らしを楽しんで、改めようとはしないのです。言い換えますと、企業の発展は平穏ときばかりではありません。常に困難が待ち構えています。そのため、企業の発展においては、経営者はステークホルダーの利益を考慮しなくてはなりません。企業が問題に直面したとき、経営者はステークホルダーの問題を考えなくてはなりません。たとえ自分の生活が大きな困難に見舞われても、「その暮らしを楽しむ」ことが必要です。なぜなら、利己主義のみに基づいてものを考える人ではないからです。

道徳的リーダーシップの持ち主が最初を守るべき基本的な行動原則は、恥を知ることです。恥を知ることとはとても重要です。一部の資本家は、自分が従業員たちを養ってやっている、社会に貢献している、だから自分が一番お金を稼ぐのは当たり前だ、などと言います。これでは恥を知っているとはあまり言えません。なぜなら、もしも多くの従業員の助けがなければ、また彼らが一緒に頑張ってくれなければ、資本家がお金を稼ぐことはできないし、資本家の商品が市場を獲得することもできないからです。したがって、恥を知ることができてはじめて、「己の欲せざる所を、人に施す勿れ」、言い換えると、恕道にいたることができる、と言えます。恕道とは、相手の立場に立って考えることです。常人にはこれは難しいのですが、それは立場を変えて考えるのが嫌だからではなく、相手の境遇を経験していないために相手の苦境を実感できないからかもしれません。一人の business man が、従業員たちの様々なニーズや苦境をすべて考慮することは不可能です。だからこそ、道徳的リーダーシップを持つ経営者であれば、それらを理解しようと、自ら動くことが必要です。このような立場に立つからこそ、企業にとって最も有益な決定を行えるのです。ただ、相互理解のためには相手の立場に立って考えることが必要だといっても、リーダーと部下の間で立場を変えて考えるのは、よりいっそう難しいでしょう。だが君子たるもの、その道徳的リーダーシップの力と魅力は、まさに立場を変えた思考にあるのです。リーダーが決定や管理を行うのは、反省し立場を変えて考えた後でなければなりません。決断と管理において修身を徹底し、「恕」を堅く心に留めておかねばなりません。そうしてこそ自らの長所を活かし、短所を克服し、欲望の膨張を抑え、自らの本分を忘れないでいられるのです。したがって、道徳的リーダーシップを持つ経営者は、孔子の言う「自分が樹立したいと思えば、まず人に樹立させる。自分が達成したいと思えば、まず人に達成させる」のようではなくてはなりません。また「天下の憂いに先んじて憂う」の観念も持っていないてはなりません。さらに、孟子の言う「わが家の老人をいたわる心持を拡張して、人の老人に及ぼし、わが家の幼児をかわいがる気持ちを拡張して、人の幼児に及ぼす」も必要で、そうしてこそ自分の進歩や発展を、社会全体と関連づけることができるのです。

したがって、互いに相手のことを考えること、言い換えれば孔子の言う恕道は、道徳的リーダーシップを持つ経営者が考慮しなくてはならない重要な原則であり、また一生涯守り続けなければならない原則であると言えます。あるとき、子貢が孔子に「一言だけで生涯、行ってゆくべきものがありますか」と問うと、孔子は「それは恕だ！自分がして欲しくないことを、他人にしてはならない（己の欲せざる所を、人に施す勿れ）」と述べました。James Leggeはこの「恕」を“reciprocity”と訳しました。孔子の「己の欲せざる所を、人に施す勿れ」も、西洋人が強調する黄金法則「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」と呼応しています。これは人と人の間の平等な交際の基礎であり、また団体と団体、国と国の間の平等な交際の基礎でもあります。西洋哲学は20世紀になってやっと「相主体性」や「間主観性」の概念を提出しましたが、その最も根本的な基

礎がまさにこの「相互性」であり、それはつまり孔子の「恕」なのです。人はまず自分を知らねばなりません。まさにギリシャのアポロン神殿の入口の名言にあるように「汝自分を知れ！」です。自分を正しく知ってこそ、他人の立場に立って考えることができ、この時初めて孔子の「恕」が意味を持ちます。孔子は自分を知るための方法として「格物致知」、「正心」、「誠意」を通じて「修身」を実現するという倫理的な規定を行いました。これは正しく自分を知るために必ず通らねばならない道です。修身によらずに自分を知ることができる者はいません。なぜなら修身によって初めて自分の魂に触れることができるし、自分が必要とするもの、人生の目的、他人との相互関係などを理性的に正しく認識することもできるからです。自分の欲望と近視眼的な物質主義的追求に止まっていたはなりません。したがって孔子の「恕」とは、修身を原則とすることによって可能となる理性的な主体間の倫理的関係なのです。「恕」と呼んでも、「間主観性」と呼んでも、そこで問題となるのはいずれも、個人の自己認識能力と理性的判断力を高め、修身に努め、相手の立場に立って考えることなのです。

孔子の倫理思想においては、君子は恕道を一生の原則としなければなりません。ただし、必要性和真実は相互に形成されるものです。あるとき孔子は曾子に問うて「私の道はただ一つのもので貫かれている」と述べました。曾子は「はい」と答えました。孔子が出て行くと、他の弟子が曾子に先生が言ったのは何のことか訊ねました。曾子は「先生の道は忠恕で貫かれているということだ」と述べました。ここで言う「忠」とは、古代中国語では何事も力を尽くし誠心誠意行うという意味です。James Legge はこれを “to be true to the principles of our nature” と訳しました。つまり真実を求め偽りを交えないこと、あるいは「本当のことを話し真面目にやる」ということです。言い換えると、真実が大切に、嘘をついてはいけない、ということです。これは古代中国語の「忠」の意味に近いものです。そして、偽りを交えない状況下においてこそ、孔子の提唱する「恕」は意味を持つのです。「恕」の意味は「仁愛、相手の立場に立って考える」です。儒家の「性善説」に基づけば、つまりは他人にやさしくすることです。簡単に申し上げますと、「忠」は事物を認識する態度であり、「恕」は他人との関係の処理方法です。ここから孔子がいかに真と善を追求していたかが分かります。倫理思想の視点からは、「恕」こそが儒家倫理における君子の道徳的リーダーシップを理解するためのキー・ポイントなのです。ご清聴ありがとうございました。

東郷 楊先生、本当にありがとうございました。現代の中国において、儒教というものがどういう役割を果たしているのか。復古調の傾向、形式主義の復興、これはだめだ。儒教が捨てられた、合理性に欠ける、これもだめだ。そうじゃなくて、儒教の中にある最も深いもの、それは結局何だろうか。仁愛ではないだろうか。君子というものは仁愛の模範たる人である。君子の道徳的リーダーシップ、君子の持っている精神性、そういうものによって今の中国の中で新しい生命の息吹というか、新しい見方が生まれるのではないか。非常に興味深く、かつ最初のスティーヴの発言の中で紹介された儒教

の本源的なものとも共通する、とても興味深いお話を伺うことができたと思います。楊先生、ありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。(拍手)

基調講演 3

静岡県知事 川勝 平太

東郷 それでは、3 番目の基調講演に移らせていただきたいと思います。次の基調講演は、川勝平太静岡県知事でございます。

皆様申し上げるまでもないかと思いますが、川勝知事は早稲田大学を卒業後、オックスフォード大学で博士課程を取られまして、著書としてたくさん書いておられますけれども、『文明の海洋史観』という本によって日本における世界史に関する見方を大きく広げた、大きく変えた方だと思っております。

一言だけ追加させていただきますと、私はただいま現在、京都産業大学の世界問題研究所長の仕事をするとともに、川勝知事のおそばで静岡県の対外関係補佐官の仕事をさせていただいておりまして、日本の今の政治的リーダーシップの中で川勝知事ほど自分の頭の中に世界のいろいろな知識が深く整理されて入っておられて、水道の蛇口を開くとうわっと次のものが出てくるように、あらゆる識見が出てこられる方、しかも、英語と日本語で過不足なく出てこられる方は私はほかに知りません。その知事に声をかけていただいて、もう 7 年ほど静岡県で仕事をさせていただいて、たくさんの勉強をさせていただいておりまして、きょう皆様に川勝知事から基調講演を最後にやっていただく。私の誇りであるとともに、非常な期待を持ってこれから知事の話をお伺いしたいと思いますので、川勝知事、どうぞよろしくお願いします。

川勝 ご紹介いただきました川勝です。ほめ殺しの感がございましたが、尊敬する東郷和彦先生、大西先生ならびに京都産業大学の皆様方、本日はこのすばらしいシンポジウムにお招き賜り、まことにありがとうございます。

冒頭のスティーヴ・ヤング先生が、重要コンセプトとして、中国の恕、英語で訳せば *reciprocity*、それとともに、仁、義も大切で、それらは今日、日本で盛んに言われている「共生」と響き合うところがあると言われました。楊先生は利他と利己を統一する倫理的利己主義のような統合概念を出され、ヤング先生の恕、日本語では思いやりと訳されましたが、二人の先生が同じ趣旨の話をされたことに感銘を受けました。

さて、私は、日本の経済発展にかかわる武士道の役割について、日頃考えているところを申し述べ

ます。

その要点は、日本が、世界で初めて、所有と経営の分離を実現した国である、ということです。所有欲というのは、人皆持っていますけれども、土地・財産・資金などの資本を所有するのは資本家です。一方、資本家と区別されるものに経営者という存在がありますが、生産手段や資金を活用することのできる人が経営者です。つまり、資本家と経営者の分離、ないし所有と経営の分離を世界で最初に実現した国が日本であるということです。所有と経営の分離をした源流は、江戸時代に確立した武士道にあるというのが報告の趣旨であります。

さて、日本はアジアで最初の工業国家になりました。明治時代に、アジア最初の産業革命を経験し、早くも 1900 年ごろ、今から 100 年以上前に「東洋のイギリス」と言われるまでになりました。事実、1902 年、イギリスは 1 世紀余りの「栄光の孤立」を捨て、日本と日英同盟を締結しました。イギリスは日本を対等の同盟国として扱いました。19 世紀後半、すなわち明治時代の日本の経済発展は、数年前にユネスコによって「明治日本の産業革命遺産群」として世界文化遺産に登録され、日本の明治時代における産業革命は、今や世界の共通認識になっていると存じます。

19 世紀後半は、いわゆるインペリアリズム、帝国主義の時代です。西洋以外の地域、非西洋圏の大半の国々は、例えばインドのように植民地になるか、もしくは、中国のように半分主権を奪われた半植民地になりました。非西洋圏でひとり日本のみが経済発展に成功したのであります。どうしてそれが可能だったのでしょうか。

明治日本の経済発展を指導し、資本主義の父と言われる人がいます。渋沢栄一であります。1840 年、すなわち江戸時代の後半に生まれ、1931 年、昭和 6 年に亡くなった方であります。あるいは関西の経済界の土台を築いた五代友厚という方がいます。五代もやはり江戸時代の後半、1835 年に生まれ、明治前期の 1885 年に亡くなりました。渋沢さんは 1840 年から 1931 年、91 歳の長寿を全うされた方で、存命中に 500 以上の会社をつくられました。その事跡は『渋沢栄一伝記資料』全 58 巻でつぶさに知ることができます。渋沢栄一と五代友厚に共通しているのは、江戸時代に生まれた武士の出身であることでもあります。ただ幕末には、2 人とも浪人といってよく、財産というほどのものは何も持っていなかった、つまり資本家ではなかったのであります。

さて、江戸時代の武士の特徴とは、どういうものでしょうか。武士は、士・農・工・商、の身分の最上層の支配階級であります。けれども、江戸の支配者武士の特徴は、土地を持っていなかったのです。当時の世界で、支配者階級で土地を持たなかった、つまり地主でないのは、江戸時代の武士だけあります。そのことがどうしてわかるかといいますと、例えば、明治 6 年、1873 年に地租改正が行われました。これは日本の全国の土地の所有者を確定したものであります。土地の所有者を確定し、土地の所有者から地租という税金を徴収する目的で地租改正が行われたのであります。これによって土地の所有者が確定したのですが、土地を所有していたのはすべからず農民であり、江戸時

代の武士層ではなかったのであります。

ほかにも江戸時代の武士層が土地所有者でなかったことを示すエピソードがございます。明治の4年から6年、すなわち1871年から73年、丸2年かけて岩倉具視という貴族をリーダーとし、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文など明治維新のそうそうたるトップリーダーたちが丸2年かけてアメリカとヨーロッパを視察して回りました。その記録は『米欧回覧実記』として今では岩波文庫で簡単に読むことができます。岩倉使節団が発見したのは、西洋の貴族はすべからず地主であることでありました。帰国して旧武士層で明治の指導者になった方たちは、新しく華族として貴族階級に列したわけですが、土地を持っていないので、西洋の貴族にならって栃木県の入会地、共有地、コモンズであった那須野が原に土地を求め、大土地所有者になりました。この那須野が原は、東京から首都を移す法律が定められ、首都機能移転の筆頭候補地として上がっているところであります。

さて、もう一つ、サムライの特徴は、サムライの思想、すなわち武士道を身につけていたことでもあります。武士出身の新渡戸稲造という方は、江戸時代の末に生まれて、イングリッシュで『BUSHIDO』という本を1899年、明治32年にお書きになっています。新渡戸稲造はなぜ英語で武士道を書いたのでしょうか。それは西洋の倫理の基礎であるキリスト教を意識して、西洋のキリスト教に当たるのが日本では武士道であるということを示すことが目的でした。ほかに内村鑑三という、やはり武士出身で江戸時代の末に生まれ、1930年まで生きた方が、『余はいかにしてキリスト教徒になりしか』という本をお書きになっております。いわゆる無教会主義のキリスト教者でプロテスタントですが、内村鑑三もまたその膨大な著作の中で、武士道はキリスト教に匹敵する精神であると論じています。

今、武士と言いましたが、世界的にはサムライという言葉のほうが通用しております。日本のサムライというのは文武両道で、徳義を重んじ、例えば「義を見てせざるは勇なきなり」といった言葉にある通り、勇気を大切にし、信義を重んじ、知性が高く、学問を怠らない、そうした存在であります。日本のサムライは、西洋ではイギリスのジェントルマンに当たると考えればよいかと存じます。

サムライが最も重んじたのは、先ほどの楊先生のお話にもございましたが、「恥を知ること」です。「破廉恥なことはしない」、「廉恥心を持つ」ということであります。先の大戦中、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトという女性は『菊と刀』という本を著しました。『菊と刀』はベストセラーになった書物であります。その本の中でルース・ベネディクトさんは、「西洋のキリスト教徒は罪を重んじる。しかし、日本人は恥を重んじる。」。そういう比較をなさっております。恥ずかしいことはしないというのがサムライの根本精神であります。

武士道について江戸時代に書かれたものとしては、「武士道とは死ぬことと見つけたり」という言葉で知られていますが、18世紀初め、1716年に当時の鍋島藩、現在の佐賀県の武士、山本常朝の『葉隠』が有名であります。ほかにも既に戦国末、16世紀末の『甲陽軍鑑』がございますが、これは

甲斐の武田軍について書かれた軍書で武士の生き様について述べたものでございます。あるいは17世紀の『諸家評定』（1621年）、『可笑記』（1642年）などがございます。

さて、武士の仕事は何だったのでしょうか。もともと平安時代の後半、すなわち10世紀、11世紀、12世紀のころであります。そのころ勃興した武士の仕事というのは、貴族の護衛でありました。サムライの語源はさぶろふ、貴族の近くにさぶろうて身辺を警護することでありました。しかし、やがてみずから開墾し、そこを根拠地にして実力をつけた武士層が台頭してまいります。鎌倉時代は武家の時代であります。鎌倉武士たちは家産を守る、家の財産を守ることを本分とするようになりました。家産とは自分の切り開いた所領のことです。在地領主、地侍という言葉がありますが、武士と土地とは不可分でした。また武士の生き方を示す言葉に「一所懸命」というのがあります。最近は一生命と書きますけれども、もともとは一つの場所、一所に命をかける。すなわち力をつけた武士が所領を開拓し、獲得した所領を命がけで守り抜くことが一所懸命であり、それが当然とされた生き様をしていました。やがて室町時代後半、特に応仁の乱以後になりますと、所領獲得競争が盛んになり、領国と言われる大規模な所領を持つ戦国大名が登場します。彼らにとって所領は重要で、土地と武士とは一体だったわけでありました。

ところが、戦国時代を終焉させる人が出てきます。全国を統一したのは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、この3人の英傑でございました。16世紀後半から17世紀初めに活躍した3人の英傑に共通した大事業の一つが兵農分離であります。すなわち武士を城下町に集住させました。それを完成させたのは家康で、一国一城を命じて、武士を城下町に集住させました。家康は、大阪の地にありました豊臣家の牙城、大阪城を1614年の冬の陣、1615年の夏の陣で完璧に滅ぼします。そして1615年夏の陣で豊臣氏を滅ぼした後、元号を元和と改めました。元和というのは、和を元（はじ）めるという意味でありまして、元和の年間は1615年から1622年でございましたが、この時代は元和偃武、武を置く、すなわち戦争をしないということでもあります。何世紀にもわたる大きな戦乱が、後を絶ち、天下太平になったことを元和偃武という言葉が表現しております。やがて幕末の動乱まで、徳川時代の全体を後世の学者は「バクス・トクガワナ（徳川の平和）」と呼んでおります。

その始まりが大坂夏の陣による豊臣氏の討伐でございました。家康は先ほど申しましたごとく元号を元和に改め、同時に、元和元年、1615年に武家諸法度、武家たるものが何をすべきかということで、左に文、右に武、すなわち勉強をしろと定め、同時に一国一城を命じました。それまで戦国時代でございますから、諸国にたくさんの要塞がございましたが、一国に一つの城しか認めない、という命令であります。そして、武士はそれぞれの場所を離れて、一国一城の城下に居住することを命じられたわけでありました。

では、城下における武士の職分は何だったのでしょうか。江戸時代の身分は、ご案内のごとく士・農・工・商でありました。農・工・商は農民・職人・商人でありますから、何をするかは明々

白々であります。では、士分たる武士の職分は何でしょうか。これを明確にしたのが『士道論』を書いた山鹿素行という方で、この人は1622年から85年の生涯を送りました。山鹿素行は、現在の福島の会津に生まれた大秀才で、朱子学を学び、朱子学を読み切って、その抽象性を批判し、朱子学の原点に当たるべき古学を奨励し、『聖教要録』という本を著します。先人の教えをまとめたものであります。しかしながら、この朱子学批判が幕府の咎めに遭いまして、播磨の赤穂に流され、そこで赤穂藩の師範役となります。今の東郷さんが静岡県でやっているような方でございます。藩士の仇を打つため、吉良邸討ち入りをした大石以下47名の赤穂浪士が山鹿流の陣太鼓で吉良邸に討ち入ったことはよく知られています。それはともかくとしまして、山鹿素行は『中朝事実』という本も著しております。中は中国を、朝は日本のことを言っておりまして、そしてこの当時、既に中国は女真族、満州族という、夷狄によって支配されているということから、日本の優越性を説きました。

私が申し上げたいのは、彼が士道論を著して、武士の職分が経世済民である、経国済民、国を治め民を救うことであると論じたことであります。経世済民というのは、今の経済という文字の源流になったものであります。エコノミクス、あるいはエコノミーのもとになった言葉が経世済民であります。これは一言で言えば、政治のマネジメントと経済のマネジメントであります。マネジメントとは経営することです。江戸の武士の職分は藩の経営になりました。藩経済の経営者になったわけです。武士は経営者となり、経営の才能を磨くために学徳を積むようになりました。

各藩では藩を挙げて殖産興業に取り組みました。なぜならば、各藩は外に侵略することはできません。海外貿易も禁じられております。自分たちの土地しか資産はありません。そうした中で、例えば江戸中期では米沢藩、今の山形県の藩主の上杉鷹山。この方は1751年から1822年に生きた方で、『Representative Men of Japan』（代表的日本人）で内村鑑三がとりあげた人物です。上杉鷹山は、「君子は君子のための君子にあらず、人民のための君子でなくてはならない」、と言っており、これをジョン・F・ケネディ大統領が紹介されたことでも知られています。上杉鷹山は藩を挙げて財政改革を行い、紅花栽培の奨励などの殖産興業政策、新田開発等々で大成功をおさめました。あるいは江戸の末期では、今の鹿児島県、薩摩藩の島津斉彬という君主が出ます。西郷隆盛を見出した名君であります。この方は1858年に50歳で、明治維新の前に亡くられますが、集成館事業として知られる殖産興業政策を繰り広げられました。その事跡は、今、世界遺産の明治日本の産業革命遺産群の重要な構成資産になっております。重要なことは、藩の武士は経営者であっても、土地所有者、つまり資産家ではなかったということです。

こうした風土の中から幕末、明治維新时期に渋沢栄一とか五代友厚のようなすぐれた経営の才覚を持つ人格を輩出したのであります。

日本の渋沢栄一とよく比較されるのが、清代中国の実業家、盛宣懷です。1844年から1916年まで生きた方で、清末の官僚大実業家であります。江蘇省の出身で、当時の秀才たちがそうでありました

ように、士大夫を志し、やがて李鴻章という、この人は洋務運動で大変有名な方ではありますが、李鴻章に見出されます。李鴻章は直隸の総督になり、北洋艦隊を率いて日清戦争で敗れ、その後、清中国の全権大使として日本政府と下関条約を締結した大人物であります。李鴻章は洋務運動を指導し、近代的軍隊の創設、海軍の建設、軍事工業の推進に努めまして、義和団事変、これは19世紀末でございますが、そのときに至るまで清中国の実権を握っていた方であります。

李鴻章の右腕であったのが盛宣懷であります。李鴻章の配下で洋務派官僚として実力をつけ、自分たちを強くする自強のための練兵や理財を説くだけでなく、実業では鉄鋼業、有名なのが特に鉄道業ですが、銀行の事業も興しました。盛宣懷に特徴的なのは、経済が権力という地位に従属する、中国では官督商弁と言いますが、官としての権力を背景にしての商、すなわち経済を活用するというものであります。李鴻章も盛宣懷もマックス・ウェーバーの言う家産官僚であります。権力を持ち、そして財産を同時に持つということでございまして、こうしたあり方が中国における経済人の19世紀末までにおける形でありました。

さて、目をヨーロッパに転じてみますと、資本主義がいかにして成立したかについては古典的な説明がございます。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は学者にとっては必読文献であります。もう一つは、有名なマルクスの『資本論』で、その第1巻の最終章に書かれている「原始的蓄積」というコンセプトであります。ウェーバーの理論は、ご存じのように、神への奉仕のためにプロテスタントの方たちは勤勉に働く。勤勉であることは神への奉仕の証なのであります。そうすると、当然労働の成果が出てきます。それを浪費せずに貯蓄をする。その貯蓄の量が神への奉仕の証でありますので、勤勉に働いて、さらに貯蓄をふやす。いわば蓄積を自己目的にするような形になりまして、今度は神への奉仕という本来の動機が落ち抜けますと、蓄積すること自体を目的にする資本主義の精神に転じるわけであります。プロテスタンティズムの倫理という神への奉仕の儉約、勤勉が貯蓄の増大、富の増加を目的にする資本主義の精神に転じたというのがウェーバーの考え方です。その例としてウェーバーが挙げているのが、アメリカのベンジャミン・フランクリン、18世紀の人物ですが、この人の有名な『自叙伝』にある「タイム・イズ・マネー」、決して時間を無駄にしてはならないという標語に示される勤勉ぶりを、ウェーバーは引用しております。

また、最初の資本主義国家になったイギリスで有名なのはダニエル・デフォーです。18世紀前半に活躍した方で、世界的に知られている「ロビンソン・クルーソーの物語」の作者であります。離れ小島に漂着したクルーソーは、漂着船にあるさまざまな資材を島に持ち込みまして、富をふやしていきます。見逃してなりませんのは、漂着した小島はみずから開拓したので、ロビンソン・クルーソーは、これは自分の所有地だと宣言していることでもあります。こうした資本家的態度は、イギリス経験主義哲学の祖と言われるジョン・ロックの言うように、「自己の労働の成果は自分の所有に属する」、

という考え方としてイギリス人に共有されているのでございます。

それは、日本のことを思い返しますと、鎌倉時代、室町時代の日本の武士は在地領主とか地侍である、というのと同じ考えであります。自分の力で開拓し得たものは自分の所有物であるから、それは命がけで守る。こうした思想は今では排他的所有権としての制度になりますが、こういう考え方を持っていました。これが完全に崩れたのが江戸時代であります。所領経営においては、経営は所有の中に埋もれていたということでございます。

さて、先ほどマルクスの原始的蓄積に言及しました。マルクス資本論は第3巻までありますけれども、第1巻のみ彼が生前にまとめたものです。第一巻の最後に、*ursprungliche Akkumulation* とあり、英語版では *primitive accumulation* と訳されております。イギリスにおきましては、資本主義の勃興期に土地所有を拡大する囲い込み運動がありました。15世紀、17世紀、ちょうど日本で言えば戦国から江戸初期の時期であります。エンクロージャーが行われていました。『ユートピア』という本を書いたトマス・モアは、『ユートピア』の中で「羊が人を食らっている」と嘆いたことで知られます。農民を土地から追い出して、農民の生産手段である土地を奪い、農民を無産者に転落させるのがエンクロージャーでありました。イギリスにおける資本主義勃興期における生産者と生産手段の分離を、マルクスは原始的蓄積、まことに血なまぐさいと言って、「*primitive accumulation*」という表現で言っているわけであります。農民が土地を奪われて無産者に落ちぶれ、自分の労働力以外に売ることがない無産の労働者がつくり出され、その一方で無産者を雇用する資本と、また生産手段を持つ有産の資本家階級が確立していく過程、これが原始的蓄積の過程であります。

こうして出てくるイギリスの資本家は、同時に自分で経営をします。したがって、資本家と経営者はマルクスの頭の中では、分離されておらず、一体であります。けれども、それは違うということに初めて気づいたのはジョセフ・アロイス・シュンペーター、オーストリアの生んだ経済学者で、この人は1950年までご存命で、最後はハーバード大学の教授として亡くなります。シュンペーターは資本を所有することと、資本を活用することとは違う。それゆえ、資本家と経営者とは分かつたねばならないということで、経済発展をもたらすのは資本を持っている人ではない。経営者であると明確に論じました。西洋において最初にそのことを明快に論じた経済学者です。それを論じた『経済発展の理論』の初版はドイツ語版で1912年です。これが英語版に訳されるのが1920年代です。つまり20世紀になって初めて西洋社会においては資本家というよりも、企業を興し、経営をすることの重要性が注目をされるようになったわけであります。シュンペーターは、アメリカのハーバード大学に招かれ、彼の影響のもとで企業者や経営の研究が本格化しました。経営哲学で有名なドラッカーさんもシュンペーターと同じオーストリア出身で、シュンペーターの強い影響を受けております。ドラッカーが日本で人気なのは、経営が自立した日本の現実が、ドラッカーの経営哲学と合致するからです。

マルクスは、『資本論』では、先ほど申しましたごとく、「資本家は経営するもの」というのを前提

にしています。世界にはお金持ちと土地を持つ資産家がたくさんいます。しかし、資本を持っている人がいるからといって、そこで経済発展が起こるわけではありません。重要なのは、土地や資産や財産を所有することではなく、土地や資産や財産を活用する能力であります。

そうした観点から改めて日本の江戸初期の兵農分離を見直しますと、武士が土地所有者ではなくなったこと、現代風に言えば経営者になったことは注目されるのであります。17世紀に日本は世界で初めて、所有と経営の分離を実現したのであります。経営を見事にしていくには、学徳を積むことが求められます。富を生むために学徳を積む。富国のために徳を積む。すなわち富国有徳であります。生産者と生産手段の分離をマルクスが原始的蓄積、「primitive accumulation」と呼んだのに対して、私は所有と権利の分離こそ本来的に重要な発展の条件であるということで、それを「本来的蓄積」と呼んでおります。本来的蓄積の英語名は「primary accumulation」、私の造語であります。本来的というのは、富の本来の源泉が学徳を積む人材にあるということを強調するためであります。

現代の世界経済の経営、なかんずく不祥事が続く日本経済の経営に求められているのは、「武士は食わねど高楊枝」と揶揄されるほどに自己の富の追求には頓着せず、公益のために自己の最善を尽くす、いわば忠恕の精神を持ち、義と仁にあふれた武士のような君子である。つまり、日本の武士道精神に立脚した学徳の高い経営者である、これが重要であるということであります。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

東郷 川勝知事、本当にありがとうございました。先ほど申し上げましたように『文明の海洋史観』、知事の書かれた最も印象深い本だと思うのですが、不勉強にして静岡県で仕事をするまでこの本を読んだことがありませんでした。読んで、この本をもう少し早く読んでいたら、私の世界に対する見方も変わったのではないかと思います。きょうの知事のお話を伺っての私の印象は、きょうの知事のお話は、ある意味で『文明の海洋史観』を読ませていただいたときと同じぐらいの衝撃を受けました。企業の社会的責任ということで申し上げれば、知事は武士道精神という江戸時代に発生した精神というものがどういう社会的構成の中から生まれ、それがその後の企業経営の中に流れこんだかということを実に明快に説明されました。その武士道精神の中にあるある種の精神性、サムライ性のほうが世界的に流出されています。日本のサムライは徳義を重んじ、義を見てせざるは勇なきなりという勇気のほか、信頼、知性、学問を身につけていました。こういうすばらしい精神性を持ったサムライがどういう社会的コンテキストで生まれ、それが今の企業経営という中で、こういう精神を持ってやっていけば新しい視点が開かれるのではないかという、感銘を受けて、これ以上言葉が続きません。本当にありがとうございました。それではもう一度知事に。(拍手)

では、これできょうの前半の基調講演の部を終わります。これから15分間休憩に入ります。

(休 憩)

パネルディスカッション

東郷 それでは、後半のパネルディスカッションに移りたいと思います。

パネルディスカッションとしてこれから参加していただくのは、今、基調講演をされた3名の方と、向こう側におられます楊煦生先生、葦津敬之先生、矢野弘典先生、それから中谷真憲先生の4名でございます。

それではまず最初に、今回パネラーとして登場された4名の方から1人10分ずつ発言をいただきまして、それからみんなでディスカッションということでやらせていただきたいと思います。一番最初のパネラーとしてのご発言を楊煦生先生にお願いしたいと思います。

楊煦生先生は、北京大学に勤めておられ、ご専門は哲学でありまして、ドイツ哲学にも非常に造詣の深い方でございます。

それでは、楊煦生先生、お願いします。発言は10分をお願いしたいと思います。

楊 煦生 (北京大学高等研究院世界論理研究センター教授)

ありがとうございます。このたびは京都産業大学のお招きにあずかりまして、また東郷和彦先生にはこれらの活動をご主催いただきまして、ありがとうございます。皆様にも感謝いたします。時間の節約のため、すぐに主題に入りたいと思います。

私は主に比較思想の角度から、儒家倫理に関する解釈学のいくつかのアプローチについてお話ししたいと思います。というのも、今日の会議の議題である企業文化、企業責任という問題は、学術的に言うと、応用型倫理の領域に属します。これはまた非常に現実的な要請のある領域です。高度な実践性、高度な人類性、そして未来との密接なつながりがあります。責任という問題を考えるとき、それはいかなる文化で育まれた人にとっても密接なつながりがあります。なぜならそれは未来に向かう問題だからです。

そのため、私の発言レジュメは世界倫理 (Weltethos / Global Ethic) から始まっています。ハンス・キューング (Hans Küng) はドイツ・チュービンゲンの重要なカトリック神学者で、私の先生なのですが、彼が数十年にわたる努力を経て、このいわゆる Weltethos (世界倫理) を見出しました。それは、人類の異なる宗教思想や宗教システムの中から見出された最も基本的な理念であります。そしてキューングは、この最も基本的な、最低限の理念が、現代の我々一人ひとりにとって、異なる文化的環境や異なる経済状況を超えた共通の良識の基礎となることを願いました。この理念は、強制的ではなく、違反したら処罰するようなものでもなく、警戒感を抱かせるものでもありません。そうではなく、派

生的な原則であり、どんな文化や伝統の中にも見出すことができるのです。

世界倫理構想、あるいは1993年の世界倫理宣言における最も基本的な二つの倫理原則は、東アジア思想、具体的には儒家と、密接な関わりがあります。簡単に言うと、第一に、積極的な原則、すなわち人間性原則は、あらゆる行為は人間性に適うものであり、人間性を促進するものでなくてはならない、儒家の言葉を使えば「自分が樹立したいと思えば、まず人に樹立させる」ということです。もう一つの原則については、キュングが歴史的な比較を行いました。それは「己の欲せざる所を、人に施す勿れ」という道徳の黄金原則についての比較です。その最も早く、最も明確な表現は、孔子に見られます。その次がヒンドゥー教、次いでユダヤ教、さらにもろんイエスの三訓や新約聖書の中にも見られます。孔子の思想はこの意味で、東アジア思想の共同遺産と見なすべきもののなのです。つまり、一つは、プラス・積極的で派生的な倫理原則としての人性原則、つまり自分がして欲しいことは他人にもしてやる、「自分が樹立したいと思えば、まず人に樹立させる」、です。もう一つは、マイナス・消極的なものですが、ぎりぎりの最低ラインとして「己の欲せざる所を、人に施す勿れ」は守らねばならない、というものです。

これが我々の政治や経済に与える意義は大きなものだと思います。最近、儒家思想における議論、とりわけ現代社会との関係についての議論の中で、重要な発展がありました。それは最近になって急速に注目を集めるようになったrole ethics、「役割倫理」です。「役割倫理」の思想的な基礎は、アジア思想の特殊な形態にあります。例えばアジアの宗法社会〔訳註：親族制度を中心とする封建社会〕では、一人ひとりに自分の位置づけがあります。つまり、集団、社会関係、家族、小さな国から天下に至るまでの中で、自らを位置づけ、その位置づけに基づいて自分の倫理態度と立場を決めます。どのような状況において、どのような倫理的な選択・判断・反応を行うのか、を決めるのです。

私が思いますに、この問題は一見するとアジア的価値観の特殊性を非常に重視するものに見えますが、それはもう一つの問題を曖昧にする考え方でもあります。その問題とは、我々がある文化の特殊性について語るとき、その背後には絶対性と普遍性があるのではないか、というものです。ヤング先生、楊恒達先生、川勝先生の発言で私が注目したのも、一つの文化の特殊性に注目されつつも、実は普遍的な有効性を備えた何らかの原則にも注目されている点でした。マックス・ウェーバーはプロテスタントの倫理における恩寵への渴望がいかにして資本主義の発展を導いたのかを明らかにしました。同様に、中国の士大夫の伝統にひそむ光宗耀祖〔訳註：祖先の名を揚げる〕という考え方は、かつての士大夫階級のアイデンティティや名誉感を決定づけるものでした。さらに、さきほど川勝先生より、日本の武士階層について、その価値観や、恥や名誉についての考え方を紹介していただきました。

とくに興味深いのは、武士の名誉についての考え方です。これはアジア共通の大きなテーマが、当時の武士階層に現れていたと言えます。というのも、武士は土地との関係が切れていたため、新しい階級関係を生み出していたからです。ここから一つの問題が生じます。アジアの言語環境において、

倫理的判断はすべて、特定の役割や地位に規定されていたのか、という問題です。今のところ、私の考えではそれはノーです。我々は個別特殊な価値観の背後にある共通のモチベーションを見出さねばなりません。それは人としてのモチベーションであり、共通する価値観を前提にした尊厳といったものです。これこそが真の問題なのです。しかし、時間が限られているため、この問題をこれ以上お話しすることはできません。急いで最後の項目に移りたいと思います。

この意味で、世界的な、西洋に由来するような資本主義の精神からも、あるいは東アジアの視点からも、東アジアの人々の経済的な倫理観やモチベーションを考えることができます。我々はともに、二つの問題について議論することができます。一つは倫理における相対主義の問題です。この相対主義はマイナスのものではありません。この問題を東アジアの特殊な言語環境における倫理問題として考えてみましょう。孟子の言葉を借りて説明するならば、「兄嫁が水に溺れたとき、手を取って助けるか」と「男と女が物をやりとりするのに、直接手渡ししない」の問題です。基本原則は「男と女が物をやりとりするのに、直接手渡ししない」、「男と女には区別がある」ですが、特別な状況では違います。兄嫁が井戸に落ちてしまったら、人は本能的に手を伸ばすでしょう。この意味において、この言語環境においてこそ、責任について議論し、人類性の問題について議論できるのです。どうもありがとうございました。

東郷 楊煦生先生、ありがとうございました。東アジアに流れる共通の考え方はなにかということをごさまざまな角度からご自分のお考えと、今、川勝知事からお話がありました例えば武士道というような思想というのが日本の社会の役割の中からどういう形で生まれてきたかというようなことにも着目されて、それぞれの社会におけるいろいろな役割が結局その背景としての思想を生んでいくのだ。例えば武士道はその一つだし、それから今の東アジア全体の中で、それでは例えば相互主義というような問題についてどういう社会背景のもとでどういう思想が生まれるのかということをごみんなで考えていくことができるのではないかとのご発想としても、コメンテーターとしても心強いお話を承れたと思っております。どうもありがとうございました。（拍手）

それでは、次のご発言者として、矢野弘典会長にお願いできたらと思います。矢野会長は CRT 日本委員会の会長をしておられまして、長く東芝で欧州その他、大変重要な仕事をされた後、日本経団連の専務理事、中日本高速道路株式会社の CEO もしておられまして、静岡県でも川勝平太知事と一緒に大変重要なお仕事もしておられる、私もその関係でいつもご指導をいただいているものでございます。

きょうは矢野会長から、そういう日本における企業の問題と、それから常日ごろから深く携わっておられる儒教のこともあわせてお話を伺えたらと思っております。よろしく申し上げます。

矢野 弘典（CRT 日本委員会会長）

東郷先生、ありがとうございました。

私は、大学を出てからずっと民間企業で育ち、経済団体の役員あるいは道路会社 CEO など務めてまいりました。そこで、経営者として、ビジネスマンとして今日のテーマをどう受けとめているかについてお話ししたいと思います。

お三方の基調講演は示唆に富んだ感銘深いものであり、心からお礼申し上げます。現在、静岡県ではインフラの関係の整備のお手伝いをしていますが、それ以外にも教育改革を今、知事から全面的に委ねられて取り組んでいます。幼児教育から始まって義務教育、高校、大学、大学院、そして社会人教育に至るまで十分な教育の場を提供しよう。本当に学びたい意識の人たちにはあらゆる機会がある、そのようにして、県を挙げて人づくり、生涯教育の場づくりを進めたいと考えています。県の目指す「富国徳の人の人づくり」に向けて、各分野のエキスパートと共に注力しているところです。まだ途中であります。また、個人的には孫の世代に東洋の古典を教えたいと思ひまして、「おじいちゃんの論語塾」という寺子屋、小さな授業料なしの学校を自宅で開いております。

それでは、本論に入りますが、今、世界は大きく変わりつつあります。パラダイムチェンジといわれて久しいところです。グローバリゼーション、ICT 革命、それが今や AI の時代です。先進国の少子高齢化、多様化、あるいは自然環境の問題も抜き差しならないところにまで来ています。その中で、CSR（企業の社会的責任）にとどまらず、あらゆる団体や組織の持続可能性をどう考えるか、これは本当に重要な課題であると思います。

CSR、ひいてはサステナビリティの基本はどこにあるかという、一番大事なのがリーダーシップのあり方だと私は考えます。リーダーの質が高くなければ、なにをやってもだめなのです。幾ら口で言っても、紙に書いても、それだけで目標は実現できないのです。その点で、私は東洋の古典から、リーダーシップのあり方について数々のすばらしい示唆を受けてまいりました。『論語』を中心とする儒教は、国の統治の手段として用いられた時代もありますが、それを今再現するのは困難なことですし、またその必要性もありません。しかし、原文に直接あたって繰り返し読めば分かりますが、『論語』『大学』など、四書五経はみな人間形成の根本にかかわる重大な指針を語っています。人類の知恵の宝庫だ、と私は思っております。

『論語』で私が特に感銘した部分、電氣的なショックを受けたような一文をご紹介します。全 20 編のうちの子路第 13 編に、孔子が弟子の子貢と問答を交わしているところがあります。子貢が先生に「どういう人が第一級の人物ですか」と尋ねたときに、先生は「己を行いて恥あり、四方に使いして君命を辱めず。これぞ第一級の人物である」と言ったのです。ここで言う恥は、シェームですね。もう一つの辱めはディスグレースという言葉が適当だろうと思います。大事なのは前者の恥、つまり一個の人間として恥を知ることです。これが人間形成の根本だと断言しているわけです。それ

をしっかりと身につけなさい。自分の良心に照らして、自らの言動に恥ずべき点がないかどうか、自分ひとりの時間、静かな時間をもって確かめなさいということです。『大学』という本には、「独を慎む」という言葉がありますが、そこから人間形成が始まるのだと思います。その上で、「四方に使いして君命を辱めず」、国の代表として外国に行って、堂々と渡り合って辱められることのない人物を、第一級と孔子は評したのです。

子貢は大変賢い人で、次々に質問を重ねます。「先生、それでは第二級はどういう人ですか」と聞きました。これに対して孔子は、「宗族孝を称し、郷党弟を称す」、孝・弟の人と答えたのです。これは親孝行とか目上の人を尊重するという意味ですが、今日の議論の中でも出ていました、仁あるいは忠恕の具体的展開と言えます。忠は真心で、恕は思いやりですが、それが家族に展開すれば親子兄弟が仲よくなる。自分の地域コミュニティに展開すれば社会の融和を図る人として、有用で尊重されるということでもあります。

子貢はさらに語を継いで、「では、第三級はどういう人ですか」と聞いてくれました。後世の私たちが、孔子の奥底の気持ちを知るにこれ以上の問いはないと思いますが、そのときに孔子が答えたのは、「言必信、行必果」でありました。言葉に信義があり、行いが必ず結果を伴う。大した人物ではないが、あえて言えば第三級だと答えたのです。これは、今時のリーダーシップ論では第一級に数え上げられるリーダー像だと思いますが、私にはこれがなぜ第三級なのだろうか、という疑問を長い間抱いていました。やっと分かったことは、「言必信、行必果」ぐらいでなければ、つまり知的に十分な能力を発揮できなければリーダーにはなれない。しかし、それはリーダーの最低条件にすぎない。第一級、第二級に示された人格の形成そのものが、実は本当の信望あふれるリーダーの資格だと言っていることに気がつきました。

この師弟問答に大きな触発を受けてから、色々考えるようになったのですが、顔淵第12編で孔子は、「内に省みて疚しからずんば、何をか憂え何をか懼れん」と述べています。自分の良心、内心に照らして疚しいところがなければ、何を心配し、何を恐れることがあろうか。これは人間的な自信の始まりですね。『孟子』を読みますと、「内に省みて疚しからずんば、千万人といえども我行かん」とあります。これもまた同じ意味で、自信の生まれる大元を指しています。こうした思想が、川勝先生が述べた武士道、ひいてはCSRの前身とも言える江戸時代の商業道徳として展開していったのだと思います。

これを纏めてみますと、東洋の人物論の究極の理想像は「才徳兼備の人」に行き着きます。才能と人望、徳望を兼備した人が本物のリーダーであります。しかも、徳が先で才は後でなければなりません。これを読んで、私は目を洗われるような感銘を受けまして、そういう世界をつくっていききたいものだ。若い人たちを育てる場合には、このことを心がけたいと思いました。

他にも、珠玉の言葉は数多くあります。「徳は孤ならず必ず隣あり」、これは里仁第4編にあります。

人間ができてくると、自ずから協力者が数多く現れてくる。人は決して独りぼっちじゃないと言っているわけです。また、「民は信なくんば立たず」という語が顔淵第12編にあり、私利・私欲ではなく信義・信頼の大切さを強調しています。これらはみな、経営者として大変励ましになる言葉です。挙げればきりがありませんが、私はこのような言葉を次々に発見して、『論語』『大学』をはじめとする四書五経のすばらしさを感じてまいりました。

一方私は、最近の中国の国民が『論語』をどう見ているかに興味があります。7年前の東日本大震災のときのことですが、津波で流された水産会社の専務さんが、そこで研修していた中国人20人を引き連れて高台に逃れ、皆命が助かったという出来事がありました。ところが、どうも誰かまだ残っているらしいと聞いて、専務さんが走り戻ったのです。そこにあの巨大津波が襲って、建物もろとも行方不明になってしまいました。この勇敢な行動に対して中国のブログに投書が殺到して、これはまさに「身を殺して仁をなす」ことを日本人が実地に示してくれたものだ、中国人は決してこのことをいつまでも忘れないだろう。こういうメッセージが数多く寄せられたということでもあります。「身を殺して仁をなす」は『論語』衛霊公第15編の一節ですが、中国民衆の日常に『論語』が浸透している現れではないかと私は思いました。

自分が確立しなければ経営者として立派な仕事はできない、また一人だけではできないことも確かです。その点で、ヤング先生が賞賛したキャノン賀来社長の「共生」という考え方は、実にいろいろな意味で東洋的な価値観を総合した言葉だと思います。6-7世紀の頃、今から1,400年前ですが、聖徳太子が「和を以て貴しとなす」と十七条憲法で述べた言葉もそうですが、「共生」はもともと仏教に淵源をもつ考え方だと思います。これを賀来さんが現代化し、会社の経営方針の基本に置いたのは画期的なことでありました。それをCRTの場で発表したところ、参加者の皆さん、とりわけ欧米の経営者の深い共感と呼び、CRT企業行動指針のベースになったのです。

とりあえず、感想と日頃考えておりますことを申し上げた次第です。

ありがとうございます。

東郷 矢野さん、どうもありがとうございました。かねてより儒教に関して非常に深い造詣をお持ちだということは伺っていたんですけれども、きょう矢野さんのお話の中から、特に矢野さんご自身が読み上げられた論語の中で本当に心を動かされたものを幾つかご紹介になられて、通常私たちがリーダーというと、このぐらいのことをやっていればすごくいいではないかと思うようなことが一つ一つ覆されていって、本当のリーダーというのは何かということについて、矢野さん自身がつかまれた、私の自己理解では才徳兼備、つまり本当に人間として立派になっていくということがリーダーとして大事なのだということを承りました。そういうふうになると、そこにおのずと人が集まってくる一つの大きな磁石力というものが生まれてくる。それがリーダーシップの根本だという胸を打つお話

を伺いまして、それがしかも儒教の根幹というところから発するというので、これまでの基調講演と大変かみ合ったお話を伺うことができて、かつそれが静岡県教育改革の根本になっているということで、非常に心強く伺いました。ありがとうございました。（拍手）

それでは、次に中谷先生からお願いします。中谷真憲先生は、今、京都産業大学法学部の教授でありまして、そういう意味では、僭越ですけれども私の同僚でありまして、これまでご専門はフランスの政治の勉強をされるとともに、公共政策を専門にされておられまして、公共政策のあり方について、この京都というまち、京都という実業界を舞台に、ともすればこれまで学問というものが象牙の塔の中で社会に余り大きな影響を与えずにやってきたものを、象牙の塔から解放して、京都の産業界の中に公共のあり方というものを広く問うということで、ここ数年間、前人未到の仕事をしておられる先生でありまして、世界問題研究所の私のかけがえのない同僚であります。

次に中谷先生の発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

中谷 真憲（京都産業大学世界問題研究所員 法学部教授）

過分な紹介をいただきまして、恐縮しております。中谷です。

今、ご紹介があったんですけれども、私は研究者兼実践家のような形でいろんなことをやっております。実践家のほうでいくと、グローバルという運動を率いているということになります。これはグローバルとローカルを足して2で割った言葉ですけれども、この京都というローカルの地の伝統、アイデンティティを磨き上げていくということを大事にして、それでもって逆に世界の中で唯一の価値をつくっていく、世界と勝負していくということです。そのときに核になってくるのは、この伝統を受け継いでいき、さらにそれを革新させていく若い人の力であるということで、学生たちと若い企業人の方たち、その双方に対して教育あるいは研修をして、これも教えるというよりは、一緒になって私も中に入って汗をかきながら学んでいくということをずっと続けているというのがこの5年間です。

そうした角度で言えば、きょうのこのシンポジウムともある程度関係がある活動かなと思っているのですが、そうしたことをやりつつ、2017年の4月、ですから去年の春になるんですけれども、世界問題研究所の仲間と学外の研究者の方を迎えてシンポジウム等も交えながらつくっていった『日本発の「世界」思想』という本を出しています。編集者は東郷先生、本学の森先生、不肖、私も入っております。この本が何を目指したかということなんですが、日本の独特の思想というものをキーワードとして挙げていって、それぞれに結びつけながら現実的な問題も何とか考えられないかということをやってきたんです。例えば根底的なところで言うと、無です。この無というのは主体と客体とが未分離な世界として考えていくときの手がかりになっています。

それから、間（はざま）です。間というのはいろんなものをつないでいく関係性に注目していくという思想、私が、あなたがという主語に注目するのではなくて、例えば日本語の主語というのは、子

どもに対してお父さん、お母さん、先生というふうに変わっていきますけれども、ある関係性があったときに、それに応じて主体のほうが呼称も含めて変わっていく、そうしたあり方についての思索です。これを実践的な政策に応用しようとしたものです。

そして、和なんですけれども、これは先ほども矢野さんのほうからご紹介がありましたね。まさに聖徳太子の言葉にありました憲法十七条、和を以て貴しとなすで、「やわらぐ」というのが多分正しいのだと思いますけれども、いずれにしましても、この和というもののあり方から、外交の底の底におりていくみたいなあり方を何とか探ろうとしたということになってきます。

きょう私、実は何も準備していませんで、壇上に上がって何をしゃべろうかなと思っていたんですけど、皆さんのお話をお聞きしながら、東郷先生からいただいた宿題が、葦津宮司のほうにつなが話をしてくれということでしたので、この中で和のほうで話をしていくというふうに決めて、お話をしたいと思っています。

そこに入っていくまでに、2つ指摘したいことがあります。1つ目は、日本の思想のおくれと雑種性、あるいは雑多性ということです。おくれというのは何かということですが、浅学的身で恐縮ですが、私の知る限りでいえば、日本の場合、儒学が恐らく先に入ってきて、4世紀ぐらいから来ている可能性があるらしいのです。それから仏教、この仏教は民間レベルで言うと5世紀には多分来ているのですが、有名な仏教公伝、公式に伝わってきたという意味では538年と言われているはずですが、こうやって儒教が来て、仏教が来て、多分その前には道教もあったわけなんですけれども、じゃあとなってきたときに、神道はどうなんだという話です。

実はこの点を考えていきますと、恐らく日本の場合の特徴というのは、この儒教と、それからそこに密接に関係していく律令の世界、日本初めての体系的な法律、当然中国から借りました。この世界が体系化してくるときと、仏教が入ってくるときと、それから実は神道が体系的に成立していこうとするものが出てくるときというのは、大して時期が変わらないだろうということなんです。つまりどこを見ていても、ある意味日本というのはもちろんのこと中国に比べてみるとはるかにおくらしていたということになります。律令で言えば、恐らくは2、3世紀の漢、魏の時代ぐらいから中国の場合にはあったわけで、明までいくわけですが、1500年ほどやっているのです。ですから、律令制という言葉自体ありません。これは日本が言っている言葉です。そういうことになりますので、日本の場合で言うと、いろんな衝撃がいつ頃にやってきているというのが見えてくることになるのだろうと思っています。これが6世紀ぐらいから7世紀、8世紀にかけての日本の姿なわけです。

ちょっと中学校、高校に習ったような歴史を思い出してしゃべる話になって恐縮なんですけれども、603年に冠位十二階というのができています。これももちろん聖徳太子の時代にできてきているということになるのですが、あれは600年に遣隋使を送っているんですけども、日本はばかにされるんですね。日本の使者が日本の政治のことを言ったときにまだそんなレベルかと中国に言われ

ちゃうわけです。それがあったので、これはいけないと思って、しゃかりきになっていろんな律令のことも含めてやらなければということになってきているのがその時期だということです。それで、603年、推古のときに冠位十二階をつくりまして、そして604年になってくると十七条憲法をつくっていくことになります。607-608年にもういっぺん遣隋使を送ったときには、よかったねとなってきて、それでも中国の冊封下には入れないということになるんですけども、それが当時の日本のあり方です。

ちょっと付言しますと、このときの冠位十二階、私が個人的におもしろいなと思っているのですが、十二階というのは、徳・仁・礼・信・義・智です。こういうふうに徳というのを別個にくくりだしているんです。これを大徳・小徳と分けて、仁であれば大仁・小仁と分けて、そうやって2個ずつ分けていくので、 2×6 で12になっているんです。これが冠位十二階ということになります。多分中国のほうの五常五徳でいきますと、徳というのを特にくくり出すというよりは、仁・義・礼・智・信とあると思いますので、日本の場合は徳を前に出したということなんでしょうね。

この徳というものを日本は大きく打ち出さざるを得なかった。そのことと日本が和というものを十七条憲法の最初に置いて大きく打ち出さざるを得なかった。しかも1年しか違ってないわけです。この間には大きな相関関係があるのだろうということで、単純に言ってしまうと、日本にとっての徳というのはいろんな意味を含めた和だったのだろうというふうに私は見えています。それでこの和というのがすごく謎になってくるのだろうと思っています。

この和がどう展開していくかということを追っていくのは、全く日本史の専門家でもないので難しいのですが、ただ、そこに行く前に、先ほど申し上げた神道のほうに関しても触れておこうと思います。

もちろん古い日本のアニミズムが根底にあります。多分大和朝廷の王朝の建国の過程にも関係していたと思います。しかしながら、先ほど少し申し上げたように、これが体系化していくのは後になってくるんです。体系化という意味では、仏教よりも多分後だろうと思っています。天台宗とか真言宗の後、例えば後者を受けて、両部神道をつくっていった、胎藏界とか金剛界とかにそれぞれ天照ですとかと豊受大神になぞらえて大日如来をつくっていきますし、それからその後、鎌倉に出てくる伊勢神道、これになってくるとむしろ儒教的な色彩もそこに入ってくることになろうかと思っています。したがって、こうしたものを見ていくと、神道の体系化の過程というのはむしろ外来思想のインパクトを受けて、それまでの曖昧模糊として教理がなかったものを何とか体系化していこうという努力だったのではないかと思うんですね。

そういう過程の中で出てくる日本なりの徳目というものがあつたとすると、これは恐らくいろんな神道に共通しているはずですが、「正直」になろうかと思っています。この中で私と同じように神社巡りが好きな方がいらっしゃったら知っておられるかもしれませんが、室町のころに春日明神と八

幡大菩薩、それから天照大神、この3つの神というか、三社の託宣というのが流行りまして、神様の言葉を預かる託宣ですね。この三社託宣というのが市民に流布していきます。この三社託宣の中で伊勢について出ているキーワードは正直です。この正直が当時どういう意味を持ったのかということ进行研究している菅野覚明さんという方がいるんですが、それによると、単なるオネスティということだけではなくて、ある意味赤子のような目で世界を見つめていくような、そういう清浄無垢さ的なものが入っているんです。これは神道そのものが、葦津宮司の前で申し上げるのは気が引けるんですけども、例えば白木ですとか、素焼きですとか、あるいは社を新しくしていかなければいけない。だから遷宮もしていくとか、実はそうやって新しく建物も含めてちゃんと葺きかえたり、建てかえていくということにも通じていくと思うんですけども、そうした清浄さ、清浄な目で世界を見ていく。そうした意味での正直、子どもの目というものが徳目としてあったということだと思っています。

これがずっと続いていって、先ほど申し上げたような神道の体系化も進み、江戸になってくると、鎌倉時代からやってきていた朱子学が国の学問のポジションに上がってきますので、この朱子学とも一緒になっていって、例えば山崎闇斎みたいな垂加神道の世界が出てくるといことになろうかと思っています。ここでもやはり慎みとか、正直ということが徳目として非常に強く重視されていくということになります。

和の話はどこに行ったのかと思われた方、もう少しで終わります。こうした外来思想との対決の中で、日本人がずっとわだかまっていたのは、じゃ私たちは外来思想のインパクトを受けて日本のことを考えてきたんだけど、神道にしてみてもそこに儒教が入ったり、儒教の中の朱子学が入ってきたり、仏教の要素が強かったり、吉田神道にしても神道護摩という行事があるわけですが、護摩なんて密教用語を使うわけです。私たちの心はどこに行ってしまうんだろうと。これに対応したのが恐らく国学だろうと思っています。この国学は賀茂真淵を始め、本居宣長に続いていく系譜なんですけれども、このときにおもしろいのは、歌の心を再発見するわけです。なんとすれば、その歌というのは万葉集のところに詠み人知らずがたくさんあるわけです。詠んだ人がわからない一般庶民がたくさんいるわけです。でも、それを天皇勅撰の和歌集であったとしても取り上げて、載せて、ちゃんと拾っているのが日本なんだ。歌の心は真心なんだとを感じるわけです。この真心、真情というやつですね。これをむしろ日本の和の精神になぞらえて理解していくということが起こってきます。

恐らく山崎闇斎的な考え方への批判なんでしょうけれども、本居宣長なんか非常に辛辣なんです。体系立った、儒家ぶったことは言うな。彼はそういう言い方をして、道徳、道徳と言うけれども、体系的にそんなことを言っているよりも、日本の場合というのは何か体系立ったことで持ってきたという国ではなくて、真情のほうで持ってきたのだということを言うわけです。つまり天皇という万世一統の皇統と庶民が詠み人知らずの心でつむぎ合っているような状態ですね。これをいろんなふうに神話になぞらえて考えていったりすることも当時はあったわけです。

いずれにしても、この和という言葉に本居たちが見ていたものは、歌の中に込められている心の発露なんです。心の発露の最終的なものは泣くこと、悲しむことなんです。この悲しむというのは、日本の思想の中で非常に強いんです。これがもののあわれにつながるわけです。この悲しむということがおもしろいと思いますのは、実はこれが私が一番言いたいところなんですけれども、泣く人、これは赤子が一番典型的です。泣く人、赤子に目を向けて、そこから世界とむきあっていくというのは、西洋的な契約思想とは全く逆の発想なんです。個人が自立をして、自分の頭で考えて、そしてその個人が大人の言葉でもって交渉し合うんだという主体的なあり方、契約的なあり方に対して、赤子の泣く目から世界を見つめていくという発想は全然違うということになっていくんだろうというふうに思います。

ついでながら、この和というのは、今、言ったような方向に行くだけじゃない面を持ってまして、この和、やまと心的なものを今度は別に捉えていくと、「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」という吉田松陰の歌にあらわれているような雄々しいほうの心情にも行き着きます。これは本居の後の平田篤胤の系譜ということになるわけです。

いずれにしても、外来思想のインパクトに対応して、日本なりの思想を体系化していこうとする努力、その真実を発見しようとする努力は意外におそくて、実は江戸時代になってきて、しかも賀茂真淵や本居宣長たちになってきて、初めてもういっぺん万葉集のほうに戻ってきて、再発見されていった面があるということです。このときに和というものがもういっぺん持ち出されていって、当然ながらこの聖徳太子の和ともつなぎ合わされて考えていくということになるのかなと思います。

こうした和のあり方というものは、多分プラス面、マイナス面、両方あるのかなと見ているんですけども、このあたりはまたディスカッションをすることがあれば、そのときにお話をすればいいかなと思います。

とりあえず以上です。(拍手)

東郷 中谷先生、どうもありがとうございました。私たち日本人にとっては歴史的な長い過程の中で中国から一体何を受け取って、その結果、日本はどうなっていったかというのは大問題だと思います。きょうのお話全体的に儒教というものの意味の深さについてずっと話が続いてきたんですけども、それでは歴史の流れの中で、日本は一体中国からいつごろ、何を受け取って、それが日本にどういう影響を与えてきたかということを度外視して、今の日本における儒教を考えるのは非常に難しい。今の中谷先生のお話は、7世紀の初めごろに、日本はいろんなものを中国から一緒に受け取った。一つは仏教であり、それから私の中学校的知識から言うと政治制度ですね。冠位等々の政治というふうに頭で仕切っていたんですが、実はそういうものに非常に関連のある形で中国から一つの文明的なものを受け取って、それを日本は社会の中でそれなりに吸収、咀嚼していくんですけども、そのプロ

セスの中で、実はそれまでどちらかというと普通区別して考えていたような神道に体现されるような、それ以前の日本思想というものの間で実に微妙な融合とか、いろんな関係があって今になってきた。それと同じようなプロセスが実は江戸時代のころにもいろんな形であり、それまでにあった日本のものと、それからその時点での外来的なものとはどういう関係にあるかということについて、日本人はそれなりに苦労しながら一つの世界をつくってきて、キーワードとしてそれら全部総合するものとして「和」というものがあるのではないかというお話だったと思います。ありがとうございました。

それで、今の話の流れ全体で、本来的に日本ができたころからあったものの考え方、その発展というのは常にバックグラウンドとして出てきたわけで、それが神道ということかと思うのですが、そこできょう最後のパネリストの発言として、葦津敬之先生にご発言をお願いしたいと思います。

葦津先生は、申し上げるまでもないのですが、宗像大社の宮司でおられます。宗像大社は、昨年、世界遺産をいただいたばかりで、葦津さんはそのリーダーである宮司でおられます。きょうはお忙しいところ、万障繰り合わせて私たちのシンポジウムのために参加していただきました。

それでは葦津さん、よろしくお願いします。

葦津 敬之（宗像大社宮司）

有り難うございます。宗像大社の宮司を仰せつかっております葦津といたします。今日は宜しくお願い致します。

ご承知のように、日本は神話の時代から一度も途切れることなく存在している、世界でも稀有な国です。その日本神話について、ほとんどの方がご存じかもしれませんが、確認の意味で、話を進めてまいりたいと思います。

日本神話には多くの神様がいらっしゃって多神教の部類に入ります。大きな特徴は、全知全能の神がいないということでもあります。個性的な神々がいらっしゃいます。多神教の特徴は、性善説でないと構成ができないということでもあります。

さらに日本神話の中には初代神武天皇につながっていく話があります。以降、この国の中心は天皇でございます。また基本的に武力ではなく祭祀を中心とした統治が行われてきました。ここがユニークなところで、日本の文化に大きな影響を与えているのではないかと考えております。

それから、神道には教義も教典もありません。近年まで原始的な宗教とよく言われたのですが、これについて考えていくと、教義・教典がないということは、答えが出ないということです。その都度、それぞれの時代背景の中でいろんな人が考え、神社のあるべき姿はどういうものかと言いながらも誰も答えを出してくれない。これが神道の大きな特徴であり、日本文化に影響を与えているのではないかと考えております。

今日のお話の中で普遍性という話がよく出てまいりました。今回の世界文化遺産登録までには大変苦労しました。世界文化遺産登録の手順は、まずイコモスという専門家組織が審査をした後、ユネスコの21カ国の大使が世界遺産として認めるか否かを最終的に決定します。宗像は8つの資産で構成されていますが、イコモスの審査では8つのうち4つしか世界遺産に値しないという厳しい勧告を受けました。これをひっくり返すのは大変難しかったわけですが、それから1カ月半の間に、21カ国の歴史も文化も言語も違う人たちに、どうやってこの日本オリジナルのものを説明しようかということで、外務省と知恵を絞って検討し、世界の人々に共通するキーワードを探そうという結論に至りました。後ほどご紹介をさせていただきます。

宗像という場所は、日本が最初に開国した場所になります。この地からまず朝鮮半島との行き来、交流が始まり、それからどんどん南下して、古文書で最後の記録を見ると、マカオあたりまで行き来をしています。大和朝廷と連携をとりながら、4世紀から9世紀の間、外交通商の玄関口でありました。

神道を世界の人々に説明するキーワードですが、宗教という言葉では神道をなかなか説明しにくいということで、英国の友人から「宗教という言葉を使うと勘違いされるから、スピリチュアルで神道を説明したほうがいい」とアドバイスを受けました。それから先ほど来出ておりますアニミズム、宗像は古い神社でありますので、仏教が伝来する以前からあります。現在多くの神社に社殿がありますが、それは仏教に大きく影響をうけていると考えられています。本来は、岩とか木に神々が鎮まると考えられていました。沖ノ島にも現在社殿がありますが、元々は岩に神々が鎮まると考えられており、現在も島自体が御神体とされています。これをアニミズムとして説明し明確にしようと考えました。次に、エコロジーです。これは何かと言いますと、宗像大社は海と共に生きてきた神社です。その海が地球温暖化の影響で海水温度が上昇しています。また磯焼けの問題、さらに今では熱帯の魚がたくさんいます。沖ノ島に水中カメラを入れると、珊瑚礁だらけであり、これではいけないと海の再生事業に数年前から取り組んでいます。かつそこで育成プログラム、子どもたちのプログラムを行っておりユネスコ憲章に沿っております。この3つに絞り込んで各大使に説得をしようということで、これが功を奏したということでもあります。この spiritual、animism、ecology、の頭文字をとり並び替えると sea、海になるということをお方から言われました。

これがアニミズムという表現の部分で使ったものですが、下段の部分が沖ノ島の磐座であります。社殿がありません。大きな巨岩、ここを神の依代よりしろとして祀っていました。上段が九州本土にある辺津宮の高宮斎場といわれるところで、社殿がありません。ああやって地べたにぬかずいておまつりをする。神社の古い姿があるということでもあります。

これが今年5回目になりますけれども、海の環境会議、宗像環境国際会議というものを続けております。当然海外の方もお招きして、中国の方や韓国の方も来ていただいています。海で繋がっていま

すので、そういう観点から取り組みをやっております。

具体的には、里山に生えた竹、現在竹害になって問題となっていますが、その竹を切り出して、竹魚礁を作り重石をつけて魚の子どもを産卵させる仕掛けを海に備えたりしております。

これは今、問題になっているマイクロプラスチックごみです。これは世界的な問題になっていますけれども、こういうものを回避するために今、ごみ拾いを積極的にやっております。

これは、そうこうしていましたが、フランスのパリで COP 会議がありましたけれども、オランダ大統領からの招聘で COP 会議のプレイベントに呼ばれて、子どもたちを連れて行ったというものであります。

そういう中で、やはりアニミズムをベースとした神道というのは、やはりエコロジーの部分と切っても切り離せない。つまりどういうことかといいますと、日本の神様というのはあらゆるところにいます。自然そのものの中にも神様がおりますので、我々からすれば環境破壊イコール神の破壊になるわけです。そうすると、その神をどう取り戻すかということで、ここはやはり一体の関係でやらなくちゃいけないということでもあります。

そういう中で、神道の連続性というのを冷静になって見ていくと、伊勢神宮の話が先ほどありましたけれども、どうもりズムというか、つながり方を見ていくと、特に伊勢神宮に象徴されるのですが、自然循環そのもの、神道の連続というのはまさにここを意識して造られたのではないかと思います。

そういう中で、人類の普遍的価値って何だろうかということでもありますけれども、いろんな問題がありますが、原点に返るといえるのか、これからは違いを述べるのではなくて、やはり共通する人類原点の普遍的価値を掘り下げていくということが極めて重要になるのではないかというふうに思っております。

時間がありませんので、最後に、大正時代に日本を訪れたアインシュタインの言葉に、現代に合ったものを見つけましたので、これを朗読します。

150 年前に日本が近代化して、大正時代ですから約 50 年経過して、今から約 100 年前の日本ですけれども、既にアインシュタインがこういうことを言っているのです。「日本における私の印象。日本では自然と人間は一体化しているように見えます。この国に由来する全てのものは愛らしく、朗らかであり、自然を通じて与えられたものと密接に結びついています。日本人は西洋の知的業績に感嘆し、成功と大きな理想主義を掲げて科学に飛び込んでいます。けれども、そういう場合に、西洋と出会う以前に日本人が本来持っていた、つまり生活の芸術化、個人に必要な謙虚さと質素さ、日本人の純粹で静かな心、それらの全てを純粹に保って忘れずにいてほしいものです」と残しています。

これは、今、私どもが突きつけられているテーマをまさに 100 年前にこうやって残しているということで、しみじみとこの文章を読んで、今の時代を考えたりしております。

時間になりましたので終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

東郷 葦津先生、どうもありがとうございました。ちょっと私事を言わせていただいて恐縮なんです。私は双子の兄がおります。それで、一昨日、東京の国学院で神道の博士号を取りました。皆さん神道というと思うわれますか。私も兄の博士論文を見て、とても難しいんです。日本人の方でも神道というとなんか難しい、あるいは自分に縁のないものであるかのように思っておられる方は多いかと思うんですけれども、私は兄と話をしながら、この神道の持っているいい面というか、何か深いものがあるように感じて、でもどなたかそれをうまく解説して、説明してくださる方はいないかなと思ってたのですけれども、きょうのお話は本当によく理解できたように思います。しかも最後のアインシュタインの言葉は感動的だと思うのですけれども、最初のキーワードで上げられた霊性、精霊信仰、生態学、特に神道の持っているスピリチュアリティが一体どういう形で発展し、かつどういふふうに関日本の中で生かされてきて、これからそれをどうしていこうかということの、きょうの全体のテーマであるスピリチュアリティ、霊性ということについて最後に日本人としてどういう考えがあるかということを実際にわかりやすく説明していただいて、ありがとうございました。（拍手）

それでは、時間が迫ってきているんですけれども、最低 30 分、この 8 名でのフリーディスカッションに入りたいと思います。5 時半に全体を締めることになっておりまして、最後に会場から質問もいただいているので、それを 3 スピーカーにお伺いしたい点もあり、最後にほんの若干総括的なコメントもさせていただきたいので、30 分で議論を始めたいと存じます。

時間が迫っておりますので、先ほどお願いしたようにお 1 人ずつの発言はできるだけ簡潔にお願いしたいのですけれども、別にこれからのルールはありません。この仲間で聞きたいこととか、言い足りていないということなどをどなたからでも結構ですので、お話しいただけないかと思います。どなたかいかがでしょうか。

まずはキーノートをやっていた 3 先生、いろんなコメントが出たんですが、ご自分のやったプレゼンに対するコメントについてでも、あるいはほかの先生が出されたことについてのコメントでも。スティーヴ、どうですか。

ヤング 私はとても感銘を受けました。今まで考えたことがなかったからです。中谷先生が話されたことです。調和と「和」ということをお話しされました。そしてそのあとに英語の訳では「Link（連携・絆）」と訳された言葉が使われました。これはとても洞察力が深いと思いました。私は今まで考えてもいなかったんです。

リンクということを考えますと、この単純な言葉によって皆さんが今までお話ししてくださった「武士道」についていろいろな意味に関連が出ると思います。例えば、経営と所有の分離の問題もそうです。経営者というのは、様々な利益を担う様々な人々をリンクする者ですね。楊先生が「恕」についてお話になり「君子」または紳士の役割についてコメントされました。君子とは、いろいろな

人々、いろいろな階級、いろいろな義務をもつ人々を連携させる者ですね。これは、役割による道徳性を考えるうえでもとても重要なコメントです。すべての役割は、なんらかのリンクをもちます。

孔子が「秩序とは何か、政府とは何か」という質問を受けた時に述べた強烈な答えを覚えています。彼は、4つの中国の漢字を二回それぞれ繰り返して答えました。「君君臣臣父父子子」。皆さんが君主であろうが大臣であろうが、妻であろうが夫であろうが子であろうが、兵士であろうが教授であろうがタクシードライバーであろうが、その人は何らかの人間性のリンクを果たしているのです。私たちは常に何かと連携しており、そのことに十分な注意をはらってきませんでした。ありがとうございました。

東郷 今の件について、あるいはほかの件について、いかがでしょうか。中谷先生、どうですか。

中谷 そういう積極的なコメントをいただいて、大変うれしく思っています。

絆というふうにおっしゃったことなんですけれども、この絆という言葉がそのままリンクになっていくのか、リンケージになっていくのかちょっとわからないところもありますけれども、気をつけなければいけないのは、和がそのまま絆というものではない気もするのです。先ほど私は自分のコメントの中で、和に関しては正負両面見なければいけないところがあるんじゃないかということを言い残した気がしているんですけれども、もういっぺん振り返っておきますと、和を以て貴しとなすといったときの和というのは、律令が始まっていったりするとき、それから仏教を受け入れていったりするときとはほぼ同時代に生まれた言葉なんです。ですので、あのときには君臣の間を乱すなという意味が強く出ていたのではないかとと思っています。今、申し上げた和を乱すなということが実は非常に問題になるのかなと思うんですけれども、この和を乱すなということになってくると、日本の場合、言霊信仰もありますので、つまり言ったことが実現してしまうということがありますので、結婚式では切るとか、別れるとか、悪い言葉は言えないわけです。それと同じように、日本の場合、現代の会議においても会議の空気に支配されて、何かこのプロジェクトはうまくいかないのじゃないですかということを勇気を持って言うということができにくい雰囲気のままあります。そんなふうにその和というものには何か目に見えない上下の関係ですとか、あるいは制約がかかる場合、つまり仲間内のものになっている場合というものもあるだろうということです。

そうしたものと区別されて、先ほど申し上げた国学の世界のほうに入っていくと、この和にはむしろ真心、真情、つまり詠み人知らずの歌の心だという言い方をしましたけれども、泣くのだ、悲しむのだ、それが人間のまことのあり方なのだという、こうしたものが和の形でも多分捉えられていくのだらうということです。

逆に神様の話になってしまいますけれども、スサノオノミコトの場合で言えば、武の勢いも非常に

ある神であり、同時に短歌の最初の神様でもあるわけです。神道の言葉でもアラタマ、ニギミタマとありますけれども、同じ一つの神が荒ぶる面と風ぐ、つまり平和になる、和らぐ、寛容の面、両方持つということになりますけれども、いずれにしましても、短歌の中にあらわれている真情というのは悲しむ方向に行くこともあれば、荒ぶる方向に行くことも出てくることになってきて、後者を重視していくと、また雄々しい、場合によっては武力的なものが出てくるということもあるかと思います。

ですから、和というのはなかなか捉えにくい概念だろうと思うのですが、いろんなものを含んでいるんです。これに対して契りとか、絆とか、そうしたものになってくると、少なくとも和の中のいい面を捉えた言葉なのかなという気がいたします。この絆という言葉に関して言えば、私たちの言葉に残っているのは、11年のときの東北大震災のときに、東北の方たちが震災があった後に立ち上がって、そしてじっと耐えて、お互いに助け合いながら頑張っていた。あの姿を見て、絆という言葉が多く使われたんですけれども、そうした意味ではポジティブな評価ですけれども、逆に絆を持って頑張っている、えらいねと言いつけることによって過度な負担をかけた面もあろうかと私は思っています。黙って耐える、そうした努力を貴しとするということだけじゃなくて、泣いても要求してもいいから、そこは例えばみんなが助けていくんだよとか、公的にこういう制度を整えていこうとか、もっときちんとした新制度をつくっていこうとかいう発想ももちろん必要なわけですから、そうしたことがややなおざりになりかけた面もあるのかなと思ってまして、いずれにしましても、両面的な評価だったということです。

東郷 中谷先生、ありがとうございます。日本社会の中の非常に微妙ないろんな問題が出てきたんですけれども、川勝知事、いかがでしょうか。

川勝 楊照生先生は、一番の基礎にある共通なものを見失ってはならないとおっしゃったのは、大事なメッセージです。いわば時処位（時と所と機、英語の TPO）で、あらわれ方が変わるということで、その見方はとても大事だと思いました。例えば神に帰依し、絶対服従し、儉約に努めるプロテスタントの倫理が、いつの間にか、蓄積を目的とする資本主義の精神エートスに変わってしまうのも、その例です。

矢野さんは才徳兼備と言われました。仁・義・礼・智・信はいずれも徳目で、それらの徳目を全部含むのが徳だと思います。それに才をつけて才徳と言われた。才というのは、現実をよくすることのできる技芸の才であると思います。現場を抜きにした才というのはないと思います。心の立派さだけではなくて、技術であるとか、何かをやってみせるとか、人間関係をよくする才覚であるとか、矢野さんが NEXCO 中日本でやっておられた道路建設とかが才であると思います。そういう才と徳が一体になったのが武士道だというのが私の考えるところです。武士道は文武両道であり、文武芸三道鼎立

でもあり、技芸を含んでいます。論語で言われる修身にプラスして現場をよくする実践的な才覚です。日本の企業のトップは、現場におりて、作業服を着て、現場に立ちます。こうした現場主義は、ほかの国ではあまり見られないところがあります。現場こそが才能の開花するところで、現場が基本にあります。そういう意味で、楊先生がおっしゃった普遍的なものが17世紀、18世紀には各300諸侯が実践をしないと藩が生きていけなかったということから、サムライのたしなみとして武士道が出てきたと思います。

中谷先生は和について言われました。和は訓読みで「やまと」とも読みます。和というものに日本人が込めた思いというのは非常に深い。「和を以て貴しとなす」と聖徳太子の十七条の憲法の文言は、論語には「和を以て貴しとをなすのが礼」だという脈絡の中で出てきますが、日本では十七条の憲法、いわば国の一番の基礎として和を貴しとなさいということで、次に仏法僧の三宝を敬えと出てくる。そういう儒教と仏教の両方を踏まえた文脈で日本の根本的アイデンティティになりました。和とは足すことでもあります。1と2の和は3などと言いますように。和とは合わせることですから、十七条の憲法は儒教と仏教を足し合わせている。先ほどおっしゃったように、和にはいろんなものを入れ込める。大きな和と書いて大和、これも訓読みすれば「やまと」です。和には日本の心が込められていると思います。

4世紀の応神朝のときに千字文と論語が伝わって、漢字が伝わりました。儒教の伝来に続いて、538年もしくは552年に仏教が伝わります。儒教も仏教も漢字とともに伝わりましたが、それ以前の日本の歴史は1万年以上あります。それは言いかえると日本は無文字社会が長かったということです。漢字という文字は、隣の大陸や半島で使われており、大陸と交流があるにもかかわらず、日本人はあえて使わなかったということでもあります。孔子は何か書いたか、仏陀は何か書いたか、イエス・キリストは書いたか、ムハンマドは書いたか、ゾロアスターは書いたか、何も書き残していません。弟子が後に教典としてまとめました。つまり、文字にしないことはおこなっていることを意味しません。なぜ文字をつかわなかったのか。文字に書けば、何かが失われるからでしょう。あえて字に書きとめず、生きた音声のまま、言霊を込めて相手に話す。暗唱するとか、祭りの祝詞とか、歌謡とか、音声言語がパターン化されて人々に記憶され、口承で伝承されて確実に後世に伝えられるわけです。音声言葉にこそ言霊が込めるという信仰があるとすれば、言葉はあえて文字にしなかったと思われます。無文字社会はおこなっているわけではありません。長い1万年以上の歴史があったがゆえに、かえって靈性というか、言霊への信仰が残って、「言霊のさきはう国」という日本になった。日本は万葉集に典型的なように歌の国ですね。歌の心は「あはれ」。「あはれ」は国学者の本居宣長が根本にすえましたが、平田篤胤あたりになると雄々しくなる、と先ほどおっしゃった。けれども、既に鎌倉時代に「あわれ」が転じて「あっぱれ」に変わっています。人が死ぬとあわれです。しかし、死に際が立派だと、あっぱれなりと、一気に雄々しさに変わる。「あはれ」の「は」が破裂音の促音になるだけで、一気

に雄々しき「あっぱれ」に変わるという面があったのではないかと思います。

葦津宮司は、自然循環といわれました。これは楊先生のニーチェ研究と関係して、永劫回帰、生々流転と見る世界観とも通底しています。自然循環をやまとことばに置き換えれば、「常若」に近いのではないか。サステナビリティを持続可能性と訳します。伊勢神宮では20年ごとに式年遷宮をします。神道では常に「直き、明き、清き」ことを重んじます。清めて常に原点に戻る。赤子の真っ白な原点に戻るというのは、常に若返るということで持続を可能にするので、それは「とこわか（常若）」ということではありませんか。やまとことばの「とこわか（常若）」こそが、サステナビリティという一般名詞に日本の言霊を与えるものです。若々しく、新鮮で、命の澁澁としている状態を寿ぐ心が日本人にはあります。自然循環と言うと単なる普通名詞になってしまいます。それでは言霊が入らない気がします。

以上、私の感想です。

東郷 ありがとうございます。特に今、知事のお話を伺っていて、いろいろなものがある。しかし、あえてそれに言葉を与えない。言葉がある意味で消えるようなところにむしろ一つの大きな意味があるのではないかということをお伺いしたと思うんですけども、実は中谷が申しました、世界問題研究所が5年越しにつくったというこの本、これは哲学を根とし、公共を幹とし、それから外交を枝とするという哲学・公共・外交という3つの分野の先生が20人集まって、最後に一番締めとして知事にも来ていただいてシンポジウムをやった本です。その中で幾つか重要なものがあったと思うんですけども、やはり哲学というもののの中で、今、知事のおっしゃったことは本当にそうだなと思ったことなのだと思います。いろんなことがあって、しかし、その中に言葉を与えない、言葉が消えるようなところに何か非常に深いものがあるというのが哲学をやった先生たち、私も本当にそう思った根っこがあるように思っていて、きょうのお話が、そういう言葉というものが一体どこから生まれて、その生まれたときに一番深いものとして何があるかというところに話が発展してきました。非常に感銘を持って伺うことができました。

ちょっと日本人の発言が続いたんですけども、それでは中国のほうから来られたお2人の楊先生、コメントいかがでしょうか。

楊恒達 ありがとうございます。今日の会議の内容には深い印象を受けました。さきほど、中谷先生が和の問題についてお話しされました。ちょうど昨日、楊煦生先生が東郷先生に二つの文字が書かれた書を贈られました。この二文字にはそれぞれ意味がありますが、とても有意義だと思います。その二文字とは「中」と「和」です。「中」は中国の「中」で、「和」は平和の「和」です。日本の大和民族の「和」でもあります。

この「中」の字は孔子の「中庸」思想を表しています。つまりどちらにも偏らず、中に居てこそ真に事物の本質を知ることができるということです。過激なところがあったり、どこかに偏っていると、真の知識は得られません。したがって、「中」はまた、私が今日のお話で強調した「恕」のキー・ポイントでもあります。なぜなら、「恕」とは、偏りが無い状態ではじめて相互理解ができるというもののだからです。自分の側ばかりに偏って考えたり、あるいは他の方向に偏ったりしていたら、相手を理解することはできません。必ず偏りのない「中」でいなければなりません。だから、「中庸」は我々中国人にとってたいへん重要なものなのです。深い思索があってこそ、孔子のように「中庸」を守り続けることができるのです。

また、日本の「和」、日本人が大切にしている「和」ですけれども、実は中国でもみな大切にしています。この「和」は「和を貴しとなす」のことです。どんなに矛盾、紛争、意見対立も、最終的に真の解決に至るためには、「和」の原則に基づくことが必要です。

したがって、私は「中」と「和」は今回の訪問で見出した希望だと思います。またこの「中」と「和」の関係が未来永劫平和であって欲しい、我々が何千年にもわたって育んできた関係を今後も続けていって欲しい、と思います。これは我々の希望であり、また我々の歴史でもあります。歴史上、中国と日本の間は衝突よりも平和的な交流の方が多かったのです。ですから、我々の亡くなった指導者・胡耀邦はかつて「中日は世代を超えて友好関係であり続ける」と言いましたが、我々自身もそう望んでいます。中日の間は友情がいつまでも続き、お互いに深く理解できるように願っています。

先ほど矢野先生が「恥を知る」という問題に触れられました。「恥を知る」ことは君子の理想の中で最も重要なものの一つです。「恥」を知らない人は、どんなことでもしかねません。「恥」を知るならば、経営者としても自分のためだけでなく、企業の社会的責任が必要だということになるでしょう。だから「恥を知る」ことはとても重要です。君子であれば必ず恥を知らねばなりません。小人は「節操がなく恥を知らない」です。これは子供の教育でもそうで、矢野先生が教育のお話をされたのは大変意義のあることだと思います。もし名誉の意識を持とうとするならば、不名誉なことはやってはいけない、これこそが「恥を知る」ことです。

また、川勝知事は「武士」についてお話しされました。この点は中国では語る人がいないので、今回勉強させていただきました。知事とも交流させていただきましたが、とても智慧に富み、学問的にも優れた方だと思いました。このような学術交流や思想交流は今後もたくさん行っていくべきだと思います。

最後に、葦津先生のおっしゃった「靈性」についてですが、物質的な誘惑から抜け出してこそ、ある種の靈性にいたることができ、事物の本質をつかむことができます。また我々の生きる意味は物質性にのみあるものではありません。これは人として最も根本的なものです。人とその他の動物は違います。人は物質的なものだけでなく、それよりも精神的なものを追求するのです。人が動物よりも高度

なのは結局のところ、人には精神的な追求があるからです。ですので、今回のように古代の古典や、各国の文化や宗教思想を探っていけば、相互理解を進め、現代の物質主義的な考え方から抜け出すことができるでしょう。現代の商品社会は物質的な誘惑がかなり強いのですが、物質的な誘惑から抜け出し、真に霊性の高みに至ることによってこそ、真に自我を全うすることができるのです。

東郷 ありがとうございます。それでは、楊煦生先生、引き続きコメントはいかがでしょうか。

楊煦生 ありがとうございます。私の発言はまだ不十分なもののなのですが、この機会をお借りして、ここまでの議論と結びつける形で少し敷衍したいと思います。もちろん簡単にお話するにとどまります。

我々が倫理について議論するとき、いつも考えるのは倫理の基礎を為すものは何かということです。もし倫理の問題を単に理性の問題ととらえ、それによって何かに到達し、それに基づいて規則を打ち立てるというならば、そのような倫理は全くあてにならないものだと言えましょう。

先ほどの中谷先生と葦津先生のお話をうかがい、神道についての知識を深めることができ、私の視野は大きく広がりました。また、私が持っていた神道についての考えは間違っていなかったと思いました。つまり、自然とは本来調和したものであり、内在的なリズムを持っているのです。老子の言葉を借りると「無反不復」ですが、アジアの歴史や時間の観念は決して単線的なものではありません。時間はある点から他の点に流れるのではなく、循環していると考えられます。ですから、この意味では、自然、自我、自己循環の維持というのは、人類が自らの行為を反省する一つの方法なのです。自然はそもそも聖なるものです。ただ現代の工業文明が人類を狂わせ、自分には自然を支配し、破壊し、さらに作り直す資格があると思込むようになっただけのことです。

今や、人は外部の自然を支配するだけでなく、自分自身をも支配しようとしています。例えば、最近ヒューマン・マシン・インターフェースが話題になっていますが、それでは我々は自分の中にある自然に対してどれだけの権利があるのでしょうか。自分の身体を好きなように改造したり、他の人の身体を改造したりしようとしているのです。このことから、自然の神聖さを確立することが根本的な問題につながっていることが分かります。それは、どんな宗教にも必ずある、霊的な精神の問題です。我々は超越的なものを人格化して描き、それをヤハウェと呼んだり、アッラーと呼んだり、ブッダと呼んだりしますが、呼び名は重要ではありません。最も重要なのは、超越的な言葉です。人が考えつく理性のような、傲慢なものではありません。そのような理性や通常の言葉を超越して、spiritual なやり方で超越者に近づくことが必要なのです。超越的な世界に近づくことでどこか不安な気持ちや緊張感を常に保ち、そのことによって、我々は何でもできるとか、現代のテクノロジーが人類に極めて多くの可能性をもたらしているのだからそれを使って自然を支配し自分を支配できるとか、そのよう

なことは考えないようにしていくのです。

これまで、数多くのルールがテクノロジーによって打ち破られてきました。例えば、クローン人間をいつでも作ることができるようになるかもしれません。このクローンは優れた DNA を持っているのかもしれませんが、しかし、ここには避けて通れない問題があります。クローン技術が実現したとして、もしも狂った人間がクローンで軍隊を作ったり、クローンで戦争用の動物を作ったりしたらどうなるでしょう。ここから分かることは、我々はもう一度倫理の基盤に立ち戻らねばならないということです。倫理が持っている聖なるルールに戻らねばならないのです。この点について、『中庸』の説明を借りることができます。「中庸」は極めて高度な境地と言えます。だから孔子は「白刃を踏むことはそれほど難しくはないが、中庸は難しい」と嘆じたのです。中庸の自覚を持って、中道を歩む努力をすることは、人類にとってたいへん難しいことです。それは勇気をふりしぼって刀の上を歩くよりも難しいのです。孔子の言葉遣いは普通は穏やかなもので、過激で重々しい言葉はとても少ないと思います。しかし、ここで言われている中道については、その言葉の重みはたいへんに大きなものです。ですから、「白刃を踏むことはそれほど難しくはないが、中庸は難しい」、中庸はとてとても難しい、そしてそれくらい難しい道筋だからこそ、最も価値のある道なのであり、我々が進むべき道なのだと自らに言い聞かせなくてはならないのです。

今日はこのような環境の中で、異なる文化の視点から、いつも考えている問題に新しい切り口で迫ることができ、たいへん感謝しております。それではこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

東郷 楊先生、ありがとうございました。本当に議論がかみ合ってきております。

ちょっと時間が押しておりますので、最後にまだご発言をしておられない葦津先生、矢野先生、一言ずついかがでしょうか。

矢野 CRT（経済人コー円卓会議）が、このシンポジウムの共催者でありますので、その設立の経緯と日本の経済界に与えてきた影響についてご報告したいと思います。

CRT は 1986 年に設立されました。日本と欧米との貿易摩擦を解消するため、フィリップ社 F. フィリップ社長の日本に対する呼びかけに応じて、日米欧の文字どおりトップ経営者がスイスのコー村に集まりました。そして、1994 年に企業行動指針を定めました。その過程には私も参画しましたが、皆さんは指針の各条項を決める前に土台となる基本理念を明確化することで合意し、それは三つに要約されました。一つは、先ほどもご説明したとおり、日本側が提唱した「共生」であります。2 つ目はヨーロッパが提唱した「人間の尊厳」です。これはキリスト教的な考え方が背景にあると思います。3 つ目がアメリカのミネソタグループが提唱した「ステークホルダー原則」、この 3 つの原則の上に

立って CSR を進めていこうということになったのです。民間が独自に作った CSR 原則であることと、条項の土台にある基本理念がユニークなところから、おかげさまで世界で高く評価されるようになりました。

日本でも、日本経団連の企業行動憲章の中に十分反映されております。日本経団連は日本最大の経済団体で、国を代表する 1,300 社が加入しております。入会するときには、必ず憲章を守るという一筆を入れることになっております。実行はどうかとなればなかなか問題があるかもしれませんが、少なくともそういう前提で会員が構成されているということです。何度か改訂されましたが、私も日本経団連の専務理事を務めているところに、この CRT の考え方を取り入れて、何度か筆をとって書きかえたことがあります。

去年、新しい改訂がなされ、国連が提唱しておりますサステナブル・ディベロップメント・ゴール、SDGS が加えられましたが、基本的には CRT の考え方が十分盛り込まれています。世界各国でも、余り例がないのではないのでしょうか。

ところで葦津先生のお話を聞き、人間も自然の一部だということをつくづく感じました。これは賀来さんが言われた「共生」という、もともと仏教から来た考え方と共通しています。仏教には山川草木国土悉皆成仏という言葉がありますが、それに通ずるのではないのでしょうか。こうした考え方をベースにしないと、本当の自然環境保護は実現しないのではないかという気がします。二元対立で、自然は人間が征服するものであるとする思想からは、本当の意味の自然保護は生まれないのではないか。人間も自然の一部なのだから、一緒に暮らしていくために自然を大事にしよう。これはごくごく自然な発想だと思います。葦津先生のお話に感謝いたします。

東郷 葦津先生、お願いします。

葦津 川勝知事に自然循環では軽いぞ、常若だと言われました。確かにそのとおりでございまして、今日こちらの会場に来て、私はよく見ていなかったのですが、むすびわざ館、むすびという言葉はむすひ、神道にとって極めて重要な考え方です。結んでいく、未来を信じていく。それがすなわち自然循環というか、常若みたいなものになっていくんですけれども、我々の先祖たちはそういうことをかなり意識したのではないか。

一つ私の例を申しますと、あるときに法隆寺の宮大工西岡棟梁の一番弟子の小川さんという方がいらっしゃって、昔から懇意にしています。あるとき小川さんから電話がありました。伊勢神宮と法隆寺に関するものでした。法隆寺は石の上に立っているが伊勢神宮は柱を土の中に埋めてあり決定的につくり方が違う。法隆寺と伊勢神宮ができた時代というのは、伊勢のほうがちょっと新しいんですけども、そんなに変わりません。その時代に法隆寺をつくる技術があったのに、なぜ伊勢神宮は柱を

土の中に埋めたのかという疑問からだったんです。小川さんは伊勢神宮の建物のほうは極めて日本的だと思うというのです。つまりどういうことかといいますと、多くの宗教施設は次代に苦勞させないように出来るだけ長く使える建物を造ろうとするわけです。しかし伊勢神宮は遷宮を20年に1度行い全ての建物を作り替えます。20年は本当にあっという間に來ます。私達がやったから次代の人々にもやれということです。つまり次代を信じていないとできないシステムなんです。これはむすひ、あるいは常若と言ってもいいのかもしれませんが、そういう自然循環というと軽すぎるんですけれども、そういう根底を持っている。これが神道の持っている大きな特徴かなというところであります。

それから、先ほどクローンの問題とか言われました。私もかつて神社本庁というところにいたときに、脳死についてどういう考えだとか、いろんなことを問われてきたわけでありましてけれども、これはなかなか結論を出すのは難しいと思います。我々神社界では神の領域に人間がどこまで入っているのか否かというところを一つの基準にします。しかし、なかなか神社というのは、教義、教典もない曖昧なところなので、なかなか結論を出しきらずにきってしまうという傾向にあります。ここにきて私が思うのは、曖昧というのもいいのではないかということです。特に国際社会においては白か黒か、右か左かとはっきり分けていくんですけれども、先ほど出ていた共生社会だとかいろんなことを考えていく上においては、曖昧というものもこれから国際社会だとか、国際的な価値観の中にあってもいいのかなと、そんなことを思ったりしながらお話を聞いておりました。

以上でございます。

質疑応答

東郷 ありがとうございます。

それでは、会場から最初のパネリストの方3名に質問が出ておりまして、ちょっと私たちのほうで選ばせていただきまして、各パネリストに1問ずつ質問させていただきたいと思います。

まず最初はスティーヴ・ヤング氏ですけれども、地球的課題の山積する中で、社会的利益を維持向上していくためにはイノベーションの意欲が促されていることが必要と思います。イノベーションに調整するマインドと本日のテーマに出てくる共生、恕、武士道等はどのように相関するのでしょうか。

2番目に、楊先生をお願いします。昔の考えがすばらしいのは理解しました。果たして現代企業にどの程度共有されて生きるのか。特に中国企業のミネラル・トレーサビリティと書いておられるのがよくわからないのですが、ミネラル・トレーサビリティの改善の動きはなぜなのかというご質問でございます。

それから3番目、川勝知事をお願いします。所有と経営は別であるべきと基調講演でおっしゃいま

した。世界において同族経営は多く成功をおさめていますが、しかしながら、限界があるというお考えでしょうか。

以上、それぞれのパネリストからお願いします。まずスティーヴ・ヤングさん、イノベーションの意欲が促されていると思いますが、このイノベーションに調整するマインドと本日のテーマに出てくる共生、恕、武士道とはどういうふうに関係するかというご質問です。

ヤング イノベーションの課題というのは、本当にそこに存在していると思います。しかしながら、今日、私たちは一方向に進みすぎていると思うんです。昔の世代というのはまた逆の方向でした。近代はテクノロジーによって統制されています。若い人たちはイノベーションというもののこそがよいものだ、新しいものはよく、古いものは悪いと思っています。この見方についての問題点は、今日新しいものは、明日には古くなっていくということです。なぜそういう新しいものにだけ価値を置くのでしょうか。明日には誰かが新しいもの、違ったものを作っていきます。何も定かなものはない。全て移ろい変わりゆく。したがって私たちはとても怖くなります。私たちが今立っているこの位置もあしたどうなっているかわからない。

ですから、過去から学ぶことができます。楊教授がおっしゃったように「中庸の論理」、バランスをとるということです。イノベーションはもちろん大事ですが、どのぐらい大事なのか、そしていつそれを行うのか。過去において、近代の前、イノベーションを一度も行ったことのない社会に行きますと、非常な圧迫感を感じます。イスラム教世界が直面する大きな問題は、どのぐらいイノベーションを行い、どのぐらいコーランの中で述べられ過去の世代が守らねばならないと言ってきたことを維持し続けるか、の問題です。私たちは、19世紀に西洋がこの東アジアにやってきた時の緊張を知っています。日本人も、中国人も、ベトナム人も、タイ人も、韓国人も、みな、イノベーションに対して、先祖がやってきたこととどう対処するかの問題に対処せざるをえませんでした。したがって私は、大切なことは、この「中庸」であり、バランス感覚だと思うのです。

ですから、私の意見では、自分自身を見つめ直す、自信を持つということとの関連でコメントしたことが大事です。私たちは、イノベーションをまったくやらなければ、私たちにとって受け入れられる人生にはなりません。なぜなら、私たちの人生、生活は常に変わっているからです。しかし、常にイノベーションを続けてばかりいると、原則がなくなってしまいます。私たちは、目的意識と意味というものを失います。精神的なものが失われてしまいます。イノベーションというのはそれゆえ非常に大きな課題だと思っています。結論をいえば、アジアの哲学において、中国と日本は、イノベーションについて適切なペースを保つ良好な展望をもっています。自然の循環と制度の中でいかにイノベーションと今の私たちの生活のバランスをとっていくかかの課題を考えていくかということです。

「共生」「武士道」たくさんのパネリストから様々な意見が得られました。非常に重要な中核とな

るもの、原理となるもの、これからそれをめぐって考えを深めていけるものが浮上してきたように思います。その中核となるものは、皆様の意見で、類似点の多いものでした。「共生」の中に見られました。「武士道」の中に見られました。「恕」の中やそれ以外の言葉の中に見られました。しかしながら、私は楊教授が「重要な真実というのは言葉を超える」ものだとおっしゃったことに、強くうたれました。私が非常に好む中国の「道德経 (Dao De Jung)」の一節があります。それは「道有名不道 (Dao You Ming Bu Dao)」という言葉です。「人間によって名づけられる道は、それは本当の道ではない」という意味です。これは私にとって深い哲学を表すものであり、「莊子 (Zhuanzi)」の哲学につながります。中国の「道」という思想は非常に難解ですが、私は、莊子はどこかで、言葉を超える真理というものがあるそして、もしも我々がそれを感得して、それを生かしていくことができるなら、今とりあげられているような様々な現場の共通の意味も理解できるようになるのではないかと思います。それらの言葉は、「共生」、「武士道」、または英語で、またはドイツ語で表現されることがあっても、言葉を超える何かが私たちを、言葉を超えて存在するものの核心へと導いてくれるのではないかと思いますのです。ありがとうございました。

東郷 楊先生、お願いします。

楊恒達 私にいただいた質問は、中国の古代思想が現代の企業に本当に役立つのか、今の中国の企業の改善はいかにして可能か、ということです。まず中国の古代思想ですが、孔子の儒家思想は二千年もの間有効性を保ちました。それは人間性における問題を反映していたからです。人間性の問題は古代の人も現代の人も同じように直面しているものです。それがどのような形をとろうとも、人間性の中の善と悪などの問題は常に存在しています。したがって、儒家思想が善の追求を促し、人間性の中に生まれてしまう悪から抜け出すのに役立つかといえ、これだけの期間続いたのですから、古代だけでなく、現代でも役立つでしょう。とくに現代の企業において人と人との関係を考える必要があり、また企業とステークホルダーの間の問題も考えなくてはなりませんので、儒家思想は必ずや重要な役割を果たすと思います。

次に、中国の企業には特殊な事情があります。以前は市場経済に反対し、農民が卵を売っただけで資本主義だ、資本主義の尻尾を切り取れ、卵を売るのは資本主義の尻尾だから切り取らねばならない、と言われていました。現代の中国企業は、そういう時代から市場経済へと変わってきたのです。ですから当然多くの問題が生じます。西洋の経済が高度成長した時代には、マックス・ウェーバーの言うプロテスタントの倫理が重要な役割を果たしました。しかし中国で以前のような状況から市場経済への移行が行われるときは、経済は高度成長しましたが、倫理的・精神的な教育や施策がそれにとともに進められていないわけではありません。そのため、以前はお金を稼ぐことは利己的だがまだと言わ

れたのですが、今の企業経営者は、そうだ自分は利己的だ、自分のためにお金を稼ぐのだ、これを小人と言うなら小人でけっこう、と考えるのです。こんなわけですから、ルールを守らず、倫理を軽んじ、ありとあらゆる不道德な方法で金儲けにいそしむのです。

ですから、今の状況を考えると、もちろん法律の教育も必要ですが、それ以外に、古代から受け継がれてきた優れた伝統、たとえば君子の理想のようなものを、儒家思想に対する現代的な解釈を通じて、現代の企業の問題を解決するのに役立てることによって、中国企業を変えるべきだと思うのです。実のところ、中国企業の発展が成熟に向かいつつある中で、すでに多くの経営者がこの問題に気づいてきています。経済発展が進む中で儒家の精神を発揚していくことは、可能であると思っています。

東郷 最後に知事、お願いします。

川勝 同族企業は限界に達するか。そう思います。シュンペーターという人は社会科学の本をたくさん書かれているんですけども、その中に、『帝国主義と社会階級』という論文集がございます。彼が同族企業について研究いたしまして、同族企業は3代で廃るという統計結果を出しております。しかし、自分の子ども、自分の孫にその企業を継がせたいというのは人情としてわかるわけですけども、必ずしも有能な方が出るとは限らんということで、日本では氏の時代から家の時代が変わる。その家を継ぐために養子を取る。つまり血筋でない人から持ってくる。三井にしても、三菱にしても、トヨタも今は章男さんがなさっておられますけれども、数代前はほかの方がなさっておられました。企業は多くの社員や家族を預かっているわけですから、その存続のためにどうするかというような観点からいきますと、同族というのは一つの創業者を大事にする、創業の血筋を大事にするという姿勢はきっと連綿と受け継がれると思いますけれども、その精神が受け継がれるのであって、必ずしも血は受け継がれないだろう。ただし、天皇家、あるいは浄土真宗、あるいはお花とかお茶のお家元、その他そういう血をつなぐということ自体が自己目的になっているところもありますので、これは残すために最大限の努力をしなくちゃいけないのじゃないかと思います。けれども、相当に努力が要るところに示されていますように、同族企業は企業という観点からいたしますと狭さくがございますので、こうした観点から見ますと、必ずしもこれが永久に続くいい形だというふうには企業の観点からは言えないと思っております。

総 括

東郷 ありがとうございます。

それでは、最後になりますけれども、このシンポジウムの全体について、若干総括させていただき

ます。

「企業の社会的責任とアジア思想：中国知識人との対話」ということで、本日4時間にわたりシンポジウムを開催させていただき、最後までご出席いただき、ありがとうございました。4点、このシンポジウムの位置づけを申し上げたいと思います。

第1に、企業の社会的責任ということに関しましては、先ほど矢野会長のほうから非常に簡潔に、しかし、ポイントをついてお話しになったんですけれども、80年代に日本の企業の社会的責任というのを真剣に考えようという意見が出てまいりました。これは日米欧の貿易摩擦華やかなりしころに、日米欧の知識人が集まって、経済というのはただもうけることだけじゃないだろう。それを超える何かもう少し大きなコンセプトを考えていこうということで、94年に企業の行動指標というのを作りまして、爾来その指標、考え方をずっと発展させてきておりまして、今では日本社会の中にも根付き、それから国際的にもそれをベースにした発信というのが行われていて、その企業の社会的責任、コーポレート・ソーシャル・レスポンスビリティというのが国連におけるサステナブル・ディベロップメント・ゴール、持続的な開発目標の一環として報告もされており、これは一つの安定した動きがあるということでございます。これは皆さんご存じだと思います。

しかし第2に、日本の企業がそういう貿易摩擦華やかなりしころにできた指針だけでやっていける時と時代が大きく変わってきた。どこが変わってきたのかというと、これは中国の台頭というのが世界経済を全く違ったものに変える可能性があるような大きな時代が生まれてきているわけで、78年に鄧小平の改革開放で始まったものが、92年の南巡講話におけるこれでいいんだという発言に向かって、政治は閉める、しかし経済は開放する。このものすごい大きな動きの中に私たちが投げ込まれているわけで、その中で企業の社会的責任というものをどうやって考えていくかということがむしろ今、企業の社会的責任を考えている人たちの新しい大きな課題になったんじゃないかというのが、ここに集まった人たちの共通の問題意識でありました。

そこで、第3に、きょう4人の中国の方に来ていただいて、正直言ってちょっと心配でした。日本でこうやって勉強して一生懸命やってきたことが、中国人の方とまろに話をして一体どこまで通じるか。これはきょう皆さん1日かけてどう思われたか、皆さんお一人お一人に判断していただきたいのですが、私個人でいきますと、本当にほっとしたというか、むしろ中国の方とここまでの話ができたということで、本当によかったなというふうに思っておりまして、これは一にきょうの皆さんのご発言の結果であります。

私は本当にここまで議論ができるかわからなかった点がありました。一つは儒教の問題です。これは最初のヤングさんのところから、本来の孔子、孟子の時代の儒教の中に素晴らしいものがある。しかし、その後の皇帝化された需教の中に大きな問題がある。しかし、孔子、孟子の時代に私たちみんなが学ぶ点があるのじゃないかというヤング先生の話から始まり、それから楊先生の仁愛。仁愛を

リーダーシップとする人間が本当に世界を引っ張っていく人があるというお話があり、これに矢野先生の本当の論語に出てくる指導者のイメージは何かということについての大変感動的なお話があり、そういうものを日本と中国の知識人が本当に共有できるんだという印象を持ったのが第1でございます。

次に、川勝知事のお話で、きょうは率直に申し上げて、武士道の話が川勝知事からこれほど強烈な形で出てくるということは、私、予想できなかったところでありまして、しかし、きょうのお話で、先ほども読みましたけれども、サムライが徳義を重んじ、義を見てせざるは勇なきなりという勇気のほか、信頼、知性、学問を身につけた、こういうサムライの精神性というものは実は明治以降の産業の育成の根本になってきたのだという、本当に目から鱗の話がありまして、中国の方にも無理なく聞いていただけたのではないかと思います。

それからその次に、中谷先生がおっしゃられました和。日本社会の中において形成されてきた「和」、実にそれには深い背景があって、中谷先生がおっしゃった、かつスティーヴが着目した「間」。つまり対立するものがあつたときに、ともすれば西洋の思想というのは、自分がこう言えば相手が違うんじゃないかといってそこを切る。そうじゃなくて、自分と相手が立っている同じ場所というものを考えることによって究極的に「和」が生まれるのではないか。苦勞して私たちが『日本発』の本の中で考え出した一つの考え方で、しかし、非常に日本において特徴的な考え方というのがきょうここでこれだけ深く、川勝知事の賛同も得られて深く議論できたというのは、本当に私はうれしいです。

最後に、そういう日本の場の中から生まれてきている神道というものについて葦津宮司から見事なご説明をいただきまして、最後の楊先生のご発言の中にあつたように、こういうものを含めて日本との対話というのができていけるのではないかということがきょうの全体の結論というか、共通の雰囲気になったということは、本当に喜びとするところであります。

第4であります。私たちはきょう集まった者みんなが、多分こういうような対話をこれからもっとやっていきたい。しかし、きょうはそういう意味では本当の出発点ですので、これからどうやっていくかということについてはまだもちろんいろいろ難しい問題もあるかと思いますが、とりあえずは明日、クローズセッションでもって半日きょうの議論を続けさせていただき、それから特に中国から来られた方には京都の神社、それから京都のいろいろなお寺を少しご紹介して、今回の最初の交流を締めくくらせていただけたらと思います。

繰り返しますが、これは本当の出発点であり、これからどういうふうにやっていくかということは、私たちも一生懸命勉強していきたいと思いますので、きょう縁あってここに来られた方々も、ぜひいろいろ支持をしていただければありがたいと思います。

5分おくれましたけれども、これで今回のシンポジウムを終わらせていただきます。どうぞ皆様、きょうのパネリストの方、基調講演の方に対して盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)